

勝手に書きまます銀河英雄伝説外々伝

# パウエル

作 フミヲ

地上軍 ランド・カー の中で、ビットェンフェルトは無然としていた。彼は今、この世で一番彼の気にいらなかった男の屋敷に向かって走っているのだ。その男の死を伝える為に…。

（全く、オーベルシュタインの奴、死ぬならもっと早くに死んでおけば良いものを…。そうすれば、だいぶん世の中、さっぱりしていたらどうかな。一年早ければ、ロイエンタールの奴も、あんな事にならずに済んだかも知れん。それにしても、何も依りにも依って皇帝陛下と同じ日を、自分の命日に選ばんでもよかるうが！…どうせ今まで、死神にさえ嫌われていたのだから、陛下の葬儀が終わるまで、死神の奴を待たせておけば良かったのだ！）

「〇〇分程度、ビットェンフェルトはミッターマイヤー元帥と呼ばれ、ヴェルゼーデ飯皇宮の中に設けられた臨時の元帥執務室に居た。

「ビットェンフェルト、悪いがオーベルシュタインの官舎へ赴いては呉れまいか？」  
その依頼は、思いもかけないものであった。「どうして俺が行かねばならんのだ？俺は皇帝陛下のお側にいるぞ、元帥、卿がなんと言おうがな。」

当然の如くにビットェンフェルトは、怒気すら含んだ声で、彼よりずっと小柄な男に喰ってかかった。

「…気持ち判る。判るが、誰かが行くしかないのだ。軍務尚書の死は、未だ公にな

っておらん。だが、あいつの家の者に、早く知らせてやる必要がある。最期を看取った軍医たちの話では、遺言もあると云うし、その内容も知っておく必要があるだろう。」

「そんなもの、TV電話、ウイジホンで済ませれば良いではないか！」

「…そうも行くまい。奴の地位を考えてみる、好き嫌いの感情は別として、やはり、其れなりの敬意は不さんとな。オーベルシュタインを元帥に叙せられたのも、軍務尚書に任せられたのも、皇帝陛下であらせられるのだぞ。」

「うっ！…然し、何も俺でなくとも良いではないか？ミユラだってワレンだって居るではないか？そっだ、ケスラーはどうだ？奴なら士官学校の同期の筈。」

「それも考えたが、ケスラーは、皇帝陛下の崩御の公表で治安に影響の出ないよう、憲兵隊を指揮して貰わねばならん。何しろ、あのオーベルシュタインがいなくなつたのだ。ケスラーは、軍務尚書の方も一人で治安に責任を負っている。ミユラとワレンには、ヤン・ウェンリーの後継者と知己の間柄といつことで、イゼルロンの連中との折衝をやって貰っている。」

「メックリンガーは？」

「彼には幕僚総監として、大本営の運営・維持を担当して貰っている。それに俺としても、メックリンガーには、暫くの間、俺のすぐ近くで、諸事の補佐をして貰いたい。」

「とも俺一人では、対処しきれないのでな。ビットェンフェルト、卿も、デスクワークをするよりは体を動かしている方が良いのではないか？机の前に座って、皇帝陛下の国葬の準備の書類を眺めているよりは？」

「痛いところを突かれた！とビットェンフェルトは思った。確かに、彼にとつて、書類を眺めているのは、苦痛以外の何物でもなかった。戦闘の為の作戦案ならばともかく、式典の計画だの経費だの書類は、従卒の手

の中にあるうちから、彼の頭を痛くした。だから、いつもビットェンフェルトは、その手の書類は内容の把握を副参謀長のオイゲンに任せ、オイゲンが是とした書類に承認のサインを与えていた。これは、実際には、組織として極めて危険な事であり、ビットェンフェルトが、その責任をなげがしるにしているとの批判も免れ得ぬところであったが、幸いにしてオイゲンは実務の面でも有能であり、彼より年少の上官を保護者のような気持ちで愛している無私の人であったので、大過なくすんでいた。

「そついつ事ならばやむをえんか…。仕方あるまい、行つて来よう。」

「実に消極的にミッターマイヤーの依頼をのみ、ビットェンフェルトは退出したのだつた。

地上軍 ランド・カー が止まった。小ぢんまりとした、一見何の変哲もない二階建ての家の前であった。庭には何本かの大木が立ち、月の光を遮っている。美しく整えられた芝生の上には、数時間前の風の名残が、落ち葉が積もっていた。その上をビットェンフェルトは歩いていった。玄關の呼び鈴を鳴らす。しばらくして邸内に明かりが灯り、七〇代と思われる男性が、覗き窓からこちらを見た。

「どちら様でしょうか？」

「このような時刻に申し訳ない。小官は、ビットェンフェルト上級大将である。火急の用件で伺つた。オーベルシュタイン家の執事、ラーベナルトとは貴殿か？」

「はい、左様でございますが…。どの様なご用件でございますか？生憎と主人は仮皇宮に伺候しておりまして不在でございますが…。」

（可哀想に、何も知らんのだから無理もないが…。）  
ビットェンフェルトは、自分の次の一言で、この忠実な執事を受けるであろう衝撃を思つと、苦い思いを禁じ得なかつた。

「知つておる。…軍務尚書閣下は、先程、ヴェルゼーデ飯皇宮に於いて、地球教の残党共の暴挙により亡くなられた。」

数瞬の沈黙の後、ラーベナルトはドアを開き、ビットェンフェルトを屋敷の中へと招き入れた。黙つて彼を見つめるラーベナルトに、ビットェンフェルトはオーベルシュタインの最期の言葉を伝えた。

「遺言状は、デスクの三番目の引き出しに入っているから、遺漏なく執行すること。それから犬にはちゃんど鳥肉をやつてくれ。もう先が長くないから好きになようにさせてやるように。以上だ。それから、これはミッターマイヤー元帥からののだが、遺言状の内容が知りたい。おそらく軍務尚書の葬儀は国葬となるだろうが、何か希望があれば叶えてやりたいとのことだ。」

ラーベナルトは黙つたまま頷くと、ビットェンフェルトを居間のソファーへ案内し、暫くお待ち下さいと言ひ残して二階へ去つた。おそらくオーベルシュタインの私室へ行ったのだらう。

（それにしても、もう少し驚くかと思つたのに、意外な程落ち着いていやがつたな。あの執事。）

居間の中を見渡すビットェンフェルトの目に、暖炉の前で寝ているタルメシアン種の老犬の姿が入つた。

（あれが、オーベルシュタインの犬か。主人の死も知らずに眠っているのか。まったく、使用人も犬も、主人に似て可愛げのない…。まあ、オーベルシュタインが死んでも悲しくないつていうのは判らんでもないがな。）  
そんなことを考えていると足音がした。  
「お待ちせいたしました。」

そこには、封筒を手にしたラーベナルトともう一人別の人物が立っていた。

（えっ！お、女！）  
ラーベナルトの隣に立っていたのは、黒衣をまとつた二〇代前半位の女性であった。美

貌といつて良いだろう。すなりとした姿、女性としては、かなり長身であった。蒼みがかった灰色の瞳は、ビッテンフェルトを見て怯えているように見えた。そして、何より印象的だったのは、その髪の色であった。銀髪、それも、今は亡き僚友フアーレンハイトの様な、ラチナフランドではなく、新雪のように真っ白な髪。

「何だ？女がいるんだ！そんな話、聞いていないぞ。あいつ、ロイエンタールの事を、とかく言っていたけれど、自分も女を困らせていたのだから、オーベルシュタインと女なんて、やっぱり似合わん。どう考えたって女に好かれる人間ではあるまい。」  
「思いがけない人物の登場に、ビッテンフェルトは自分がこゝへ来た理由も忘れ、半ば呆然とその女性を見つめていた。

「ビッテンフェルト、こちらが主人の遺言状でございます。そして、こちらの方は主人の従姉妹にあたられます、エリザベータ・フォン・ケストナー様でございます。」  
「フロライン・ケストナー、この度は、誠に何と言つて良いか、その、心よりお悔やみ申し上げる。」

「オーベルシュタインの言葉で我に返つたビッテンフェルトは、しどろもどろながら、エリザベータなる女性に挨拶をした。

「…ありがとうございます、ビッテンフェルト閣下。パウエル様はこのようなお口がくることを覚悟しておりました。…あの、私たちが、この後、この様にしたらよろしいでしょうか？…それから、パウエル様様の遺体は？」

蚊の鳴くような声で、しかも震えていたが、エリザベータは何か耐えて絞り出すように尋ねた。痛々しそうにそれを見やりながら、オーベルシュタインが口を開いた。  
「主人の遺言状では、葬儀は出来るだけ簡素なものにして欲しいとのこと。国葬などではなく、身内だけで。…もう、もう御身内といつても、このエリザベータ様お一人だけですが。」

「その件は、ミッターマイヤー元帥達とも相談して決めることになるだろう。フロライン・ケストナー、オーベルシュタイン元帥の御遺体は、ヴェルゼーデ仮皇宮に安置してあります。そのまま仮皇宮に安置されるにせよ、こちらの官舎へ移されるにせよ、ひとまず、フロラインも仮皇宮へ行かれた方がよろしいでしょう。小官の地上車、ランド・カーをお使い下さい。小官も御一緒いたしますから。」

「エリザベータは黙つて会釈し、謝意を表した。  
仮皇宮へ向かう地上車、ランド・カーの中は、オーベルシュタインの官舎へ来る時以上に静寂しかった。ビッテンフェルトは隣に座る白髪の女性の今にも折れそうな体を見やりながら、その女性が、今や体以上に折れそうな精神を、必死にまっすぐに保っているのを感じた。

無言のまま、地上車、ランド・カーは、仮皇宮の敷地に滑り込み、エリザベータは邸内の人となった。彼女を迎えたミッターマイヤー元帥をはじめとする高官達に会つても、彼女は一言も言葉を発せず、深く頭を垂れ、挨拶をするだけであった。  
高官達も、彼女に言葉を求めようとはしなかつた。おそらく、彼女は今、自分を保つ為に全エネルギーを集中させているのだ。一言でも発したら、そこからポツキリと音を立てて、彼女の精神の支柱は折れるだろう。

ビッテンフェルトは、エリザベータを、軍務尚書の遺体が安置されている一室へと案内した。ガラスケースの中に、既に軍服を着替えさせられて、軍務尚書の遺体は横たわっていた。その冷徹なる義眼も閉じられ、たままであった。

「一人に、いえ、パウエル様と二人にしていただけですか？」  
再び可聴域ぎりぎりの音量で、エリザベータの口から言葉が絞り出された。ビッテンフェルトは頷いて部屋を出た。

ドアを閉め、部屋から少し離れた場所ので、廊下の窓から外を眺めた。  
（皇帝、カイザー、ラインハルトの下で共に戦つた者達が、ほとんど天上、ヴァルハラへ去っていく。あのオーベルシュタインさえ死んだのだ。それにしても、あの女性は一体、オーベルシュタインの何なのだろう。「パウエル様」などとオーベルシュタインのことを呼んでいたが、…執事は従姉妹だと言つていたが、本当だろうか？全然似てないぞ。もっとも、オーベルシュタインに女がいるなどと言つても、もっと信じられんが。…それにしても、見事に真っ白な髪だったな。やはり、あれが、オーベルシュタインと暮らしては、気が苦さが絶えないからか？）

そんな取り留めのない事を、ビッテンフェルトは考えていた。彼が女性のことで色々詮索するなどといふことは、これまでに無い事だったのだが。  
何が、ビッテンフェルトの耳を刺激した。女の声で子守歌だった。オーベルシュタインとエリザベータのいる部屋から漏れてくる。先程のあの小さな声とは別人のようにはつきりとした歌声。大声を出しているのではなかつた。持ち主の意志と関わりなく、その歌声は周りの空気を震わせ、その空気はまた周りにその響きを伝えた。小さいが、はっきりと遠くまで響く声。  
「それはまるで、彼女の想いを、天上、ヴァルハラ、の軍務尚書に届けようとするかのようであった（エルネスト・メックリンガー）  
ビッテンフェルトは、悪いとは思いつつ、ドアを僅かに開けて中の様子を覗き見た。  
ガラスの棺の上に片手を置き、エリザベータは座っていた。その首みがかかった灰色の瞳は、瞬きもせず、ずっと棺の中の人物を

見つめていた。おそらく、死者に向けられた視線の中で、これ程プラス方向の感情だけで構成されたものはなかつたであろう。オーベルシュタインは、誰からも嫌われていたが、それを補つて余りある好意を、この女性から得ていたのだとビッテンフェルトは知った。

ビッテンフェルトは、彼らからめ事であったが、決して音を立てぬよう、細心の注意を払つて再びドアを閉めた。  
その後、エリザベータは何度も繰り返し繰り返して、古い子守歌を歌い続けていたが、やがて歌声は途切れがちななり、かすかな嗚咽にとつてかわつた。

皮肉な事であったが、七月二十日にオーベルシュタイン邸を訪れた事が、ビッテンフェルトの一生を左右することになった。

ビッテンフェルトは、そのまま軍務尚書の葬儀の責任者に任じられたのである。葬儀は軍務尚書の遺志を尊重し、なるべく簡素にといふことになつたが、元帥で、現役の軍務尚書となれば、身内だけという訳には行かず、やはり国葬となつた。オーベルシュタインが意見を述べることが出来たならば、

「死を悼む気持が無いのに悼むふりをするのは、偽善であるだけでなく、費用と労力の浪費だ。」  
とでも言つたかも知れない。

オーベルシュタインの国葬は、皇帝、カイザー、ラインハルトの国葬の後となつたので、冷凍ケースに入れられたオーベルシュタインの遺体は、官舎へ移され、埋葬されるまでの数日を親しい者達と過ごす事を許された。オーベルシュタインの妻と夫、そしてエリザベータ・フォン・ケストナー、それだけが彼の「親しい者」であった。

ビッテンフェルトは、彼らの今後の事も含めて、打ち合わせの為に、オーベルシュタイン邸を度々訪れる事となつた。そして、エリ

ザベール・フォン・ケストナーが、本当にオーベルシュタインの年少の従姉妹であり、四歳の時よりオーベルシュタインの被保護者であった事、かなりひどい人見知りがある事、その為、歌の才能をウエストパレ男爵夫人の学校に在学中から高く評価されたにもかかわらず、卒業後は殆ど邸内に閉じこもり、人にその存在を知られなかった事などを知った。

ラーベナルトは言った。

「閣下がパウル様の訃報を持っていらつしやうした時、エリザベート様が閣下にお礼を申し上げ、ご指示をお求めになられた事を覚えておいででしょうか？あの時、私は実は大変驚いたのです。エリザベート様が、パウル様以外の男の方にお話なさるなんて初めてでしたから。」

「男嫌いなのか？」  
「いえ、そついつ次元の問題ではございませぬ。お嬢様は……エリザベート様は、男の方を、特に若い男の方を恐れていらつしやるのです。」

「何かあったのか？」

「ちよつとこの質問は良くなかったかな？」  
と思ひながら、ピッテンフェルトは答えを待った。

「はい、四歳、オーベルシュタイン家にお越しになられたのも、それが原因でございまして。今から二〇年前、ラーベナルトは語り始めた。」

オーベルシュタイン元帥は、帝国暦四五一年（宇宙暦七六一年）に生まれた。

彼の両親は、結婚後五年を過ぎても子室に恵まれず、子供を持つことを半諦めかけていた。その為、妊娠に気がかめま恒星間飛行に身をさらすという失敗を冒してしまつたのである。オーベルシュタインが誕生し、その眼球に重大な欠陥があると判明した時、母親は、全ては自分のせいであると悲嘆に呉れた。幸い、視神経や大

脳視覚領には、何の異常も認められなかつたので、光コンビューター内蔵の義眼の使用によつて、パウルと名付けられた乳児は、日常生活に不自由なく成長することとなつた。

今から二〇年前、パウル・フォン・オーベルシュタインは、士官学校の生徒であつた。その身体的障害が遺伝的なものではなく、妊娠初期に受けた跳躍、ワーブの影響であると認められて入学を許可されたのだが、晴眼帝マクシミリアン・ヨーゼフ二世より前の時代であつたら、決して許されなかつたに違いない。卒業を目前として、オーベルシュタインは大きな希望を抱えていた。彼はどの教科においても、首席とはなり得なかつたが、必ず上位一〇名の中に名を連ねており、「なかなか優秀」との評価を得ていた。また、大貴族の息子共と違つて、自分には、忍耐力も自制心もあり、どの様に困難な状況の中に放り込まれても、冷静な判断と沈着な行動を取りうるという自信もあつたのである。生まれつきのハンディ・キヤップも光コンビューター内蔵の義眼があれば、彼の行く手を阻む障壁とはなり得ぬ筈であつた。卒業後の任地として、彼は艦隊勤務を希望していた。それは、軍の中でやはり花形であり、武勳を立てるには格好の場所であつたから。そして、武勳を立てさえすれば、昇進は付いてくる筈であつたから。

この時、オーベルシュタインの家族と呼べる人達は、母と叔母夫婦、そして、未だ幼い従姉妹のエリザベートだけであつた。父は軍人であつたが、二年前に戦死してしまつた。叔母は、母の二歳違いの一番下の妹で、両親、つまり、オーベルシュタインにとっては母方の祖父の死後、姉の嫁ぎ先であるオーベルシュタイン家へ暮らして来た。義兄つまり、オーベルシュタインの父が、自分は軍務のために家を開けることが多いから、姉

妹が一緒の方がお互い心強いだらうと言つて、自宅に引き取つたのである。

一三歳年長の叔母は、オーベルシュタイン少年にとつて、姉の様な存在でもあつた。叔母は、オーベルシュタインが、幼年学校の三年生の時に、オーベルシュタインの父の友人で内務省官吏のアクセル・フォン・ケストナーと結婚した。休暇で帰宅する度に、叔母夫妻の家を訪れるのが、少年の楽しみであつた。少年の母は、時折、その頃まだ健在だつた夫に、

「パウルったら、帰つてきてもすぐにケストナー家へ行つてしまつてすよ。少し妬けますわ。」

とこぼしたが、後に後悔した。ケストナー家の居間は、彼女の息子にとつて、くつろげる唯一の場所だつたと判つたからである。少年は、母親が少年の目のことで悩み、負い目を感じている事を幼少の頃より感じており、その為、母親の許にいても決して心よりくつろぐ事が出来なかつたのである。お互い、相手のことを気遣つたあまり、お互いの重荷となる事もあつたのだ。

幼年学校卒業の年、叔母夫妻の間に女兒が誕生した。エリザベートと名付けられたこの赤ん坊を、オーベルシュタインは崇拜した。蒼みがかった灰色の瞳とタークグレイの髪、白せきの肌、いつもにこにこ人なつこく、オーベルシュタインに手を伸ばす乳児。何の他意も無い無垢な笑顔に、オーベルシュタインは夢中になつたのである。

休暇で街に出る度、オーベルシュタインはベビー用品の店を訪れ、彼女の為におもちゃを買つて帰つたものである。然し、流石に思春期の少年としては恥ずかしかつたのか、周囲の友人にも内緒であつた。この為、オーベルシュタインは、「秘密主義者」の烙印を押され、同期からも疎まれる事となつた。成長するにつれ、エリザベートは益々オーベルシュタインを喜ばせた。三歳の時、エリザベートは言ったものである。

「パウルお兄ちゃん、エリザ、大きくなつたらパウルお兄ちゃんのお嫁さんになつてあげて。」

一八歳のオーベルシュタインには、それが幼女が必ず通る道と分かつていた。そう、自分が女であると気付いたら、身近な男性、父や兄のお嫁さんにならうと、一度は誓つたものなのだ。でも、その対象が自分だつたといつただけで、オーベルシュタインは幸せだつた。

そして、エリザベート四歳、オーベルシュタイン一九歳の夏、悲劇は起こつた。

公になつている事実はこれだけである。

帝国暦四七一年（宇宙暦七八〇年）七月、ゴールデンバウム王朝の首都皇オーディンの閑静な住宅街で、放火による火災が発生した。被害にあつたのは、内務省官吏アクセル・フォン・ケストナー邸であり、ケストナーは、夫人と共に、犯人により事前に射殺されていたらしく、焼け跡から二人の遺体が発見された。夫妻の娘エリザベートは、重傷を負つていたものの、幸いなことに殺害を免れ、屋外にて従兄弟パウル・フォン・オーベルシュタインによつて発見、保護された。犯人は不明。

然し、オーベルシュタインは、事実、或いは殆ど事実と思われる事を突き止めていた。

その日、オーベルシュタインは、夏期休暇で家に帰つて来た。折悪しく激しい雷雨で、ケストナー家へ行くつもりが出そびれていた。

（雨が小降りになつたら、すぐに行こう。エリザが、この人形を気に入つてくれるといいのだが……。）

従姉妹へのプレゼントを片手に、オーベルシュタイン邸二階の自室の窓から、ケストナー邸の方角を見やつていた彼は、突然の爆発音と火柱に驚いた。正に彼の見ている方角で、それは起こつたのである。

まさかと思いつつ階下へ駆け下りたオーベ

ルシュタインは傘も差さずに豪雨の中へ飛  
び出した。

「パウル、パウル、どうしたの？」

「パウル様、せめて傘を！」

母やライベナルトの声を無視して、オーベル  
シュタインは走った。走って、走って、叔母夫  
妻の家の前に着いた時、オーベルシュタイン

の義眼に映ったのは最悪の光景であった。ケ  
ストナー邸が燃え上がっていた。裏で犬の

鳴き声がする。ケストナー家で飼っている  
ダルメシアンだった。

「いや！助けて、お父さん、フアーター、

お母さん、ムッター……！」

エルザの声だ！オーベルシュタインは、裏庭へ  
駆け込んだ。プラスチックの発射音、逆光の

中、犬の影がエルザのそれと重なり、閃光  
に賣かれた。エルザの体がゆっくりと倒れる。

犬の体がその上に鈍い音とともに崩れ落  
ちた。

「やったか？」

「さあ、どうか？犬が邪魔じゃがったか  
ら……。」

二人の男の声

「誰だ！何をしている？」

オーベルシュタインは、男達に飛びかかっ  
ていった。不意を突かれたのか、プラスチック

手にしていた男がよろめき、その手からプ  
ラスターが離れた。炎に赤く照らされた二

つの顔をオーベルシュタインは、はつきりとそ  
の義眼に捉えた。消防車の音が聞こえる。

おそらく警察も近づいているに違いない。

その時、エリザベートが弱々しい声をあげ  
た。

「うっ……ん……。」

「エルザ！」

オーベルシュタインの注意がこちらに取られ  
た瞬間、男達は、オーベルシュタインを殴り

つけた。目の前が暗くなった。

気が付いた時、オーベルシュタインは、医療  
チームの人間に囲まれてベッドに横たわって

いた。

「君、大丈夫かね？」

「はい、私は……エルザは？エルザはどこで  
す？」

「エルザ？あの女の子のことかね？安心して給  
え。重傷だが急所は外れている。今、手術

中だ。あの犬が盾となって、弾がそれたん  
だな。不幸中の幸いだっただけ。」

「叔母夫婦は？」

「……。」

数瞬の沈黙が、オーベルシュタインに真実を  
伝えた。

やがて、警察の取り調べの人間が来て、幾  
つかの質問をしていった。オーベルシュタイン

は、目撃した男達の顔を、モニターに写  
作成ソフトで再生してみせた。係官は、

「これだけ、はつきりしていれば、すぐ割り  
出せるよ。」

と言った病室を去っていったが、遂に犯人の  
割り出しには到らなかった。オーベルシュタ

インが、その件で当局に問い合わせると、こ  
んな返答が返ってきた。

「君の見たのは、幻覚だろ？君は義眼だ  
そっだが、あんな状況では、正確な視覚は  
得られないものさ。」

退院したオーベルシュタインは、叔母夫妻  
の葬儀に出席した。そして参列者の中に、  
あの男達を見出した。年は若い、叔父の

上司で、門閥貴族の子弟と言ったことだった  
美人と評判の高かった叔母に興味を示し

たのを、叔父が手ひどくはねつけたらしい  
という事も、参列者達の間で小声で交わ

されていた会話から分かった。

（当局は、権力に屈したのだ！）

オーベルシュタインは歯がみした。こんな理  
不尽なことがあって良いのか？怒りはエリ

ザベートの病室を訪れた時に更に燃え上  
がった。

エリザベートの看病をしていたオーベルシュ

タインの母は、オーベルシュタインが病室を  
訪ねると、沈痛な面持ちで息子を言った。

「パウル、驚かないで頂戴ね、エルザがどんな  
に変わっていても……。いいわね、パウル？」

母親の向こうに、小さなエルザの姿があっ  
た。オーベルシュタインは息をのんだ。ター

クグレーだった筈のエリザベートの小さな頭  
は真つ白だった。恐怖によるものと医師は

説明したが、エリザベートの体の傷が癒え  
るにつれて、エリザベートの変化は益々はっ

きりしてきた。あの人なつこになったエリザ  
ベートが、人を恐れるのである。特に若い男

性の姿を見た時は、ひどく怯えて、半狂乱  
と言っても良かった。笑顔はすっかり影を

潜めた。可愛らしいお喋りが口を突いて出  
ることも無くなった。あれ以来、雷が鳴る

としがみついてきて離れないエリザベートを  
抱きしめて、パウル・フォン・オーベルシュタ

インは自らに誓った。いつか必ず、エルザの敵  
を討つてやる。敵は、あの二人だけではない。

今の権力そのものだ。

オーベルシュタインの怒りは自らにも向け  
られていた。あの日、何故、雨でもケストナ

ー家へ行かなかったのだらう。あと一〇分  
早く家を出ていたら、エルザをこんな目に

遭わせずに済んだかも知れないのに。

怒りは、やがて他の感情も道づれに、冷  
たい炎となって凝結していった。

やがて、エリザベートは退院し、オーベルシ  
ュタイン家の住人となった。五年後にその年

流行した悪性の風邪、フリードリッヒ  
四世の皇后が、これに罹って亡くなった為

皇后風邪と呼ばれている。をこじら  
せて亡くなるまで、オーベルシュタインの母

親は、傷心の幼い姪を、わが子の様に可愛  
がったが、彼女の心は、なかなかその傷口

を塞がなかった。そして、オーベルシュタイン  
は出世より従姉妹を選んだ。士官学校を

卒業したオーベルシュタインは、当初の希望  
を取り下げ、後方の地上勤務を希望した

のである。艦隊勤務では、エリザベートの世

話をすることなどできなかつたから。

「成る程、あの白髪には、そんな訳があつた  
のか。」

「ピッテンフェルトはライベナルトの話を聞いて  
嘆息した。

「はい。」

「オーベルシュタイン元帥が、前線に出るこ  
とが少なくて、後方勤務でデスクワークに精

を出していたのも、全くフロイライン・ケスト  
ナーの為だったという訳か？」

「おそらくは。」

「でも一生、オーベルシュタインの屋敷の中  
にこもって過す訳にもいかんだろう？ど

うするつもりだったんだ？……まさか、……  
まさか、自分の嫁さんにもするつもりだ

つたのか？一五歳も年下の従姉妹を？」

「さあ、その辺りの事は、私には判りかねま  
す。大奥様はそれとも良いとお考えでいらつ  
しやうたよつですが、エリザベート様は無口

でいらつしやいますから、あまり外見から  
は分かりませんが、実に伶俐な方でござい

ます。ヴェストパーレ男爵夫人の学校におい  
での時も、男爵夫人が、恐れ多い事ながら

フロイライン・マリンドルフ、今の后妃様と  
殆ど遜色無しと言われたそつにございま

す。后妃様はそれが誰の目にも明らかだが  
エリザベート様は自分と自分の信じる者に

しかそれを明かさないと、ですから、パウ  
ル様の伴侶として充分であると思われたの

ではないかと存じます。然し、パウル様はエ  
リザベート様の望まぬ事をなされる方では

ございませぬし、エリザベート様は自分の  
お気持ちをなされぬお方でいらつしやいま

すから、大奥様がそれを望まれてもなか  
なが難しかったことと思ひます。」

「ふーん。」

冷徹一辺倒、無情の権化とばかり思つて  
いたオーベルシュタインの意外な話に、ピッテ

ンフェルトは何と言えは良いのか判らなかつ  
た。これまでの自分のオーベルシュタインへの

嫌悪感に、彼の手段を選ばぬ策謀家ぶり  
と、前線での指揮を執るのではなく、後  
方の安全地帯で、デスクワークをしていた  
卑怯者という印象が強かった為であった。  
もっとも、オーベルシュタインは決して卑怯  
者などではなく、命じられれば前線だろ  
うと顔色一つ変えずに赴いたに違いないの  
だが、ヒッテンフェルトにとって、武人として  
の矜持は前線で敵と戦ってこそ保たれるも  
のであったから、その価値観から遠く隔た  
った場所に立っている義眼の軍務尚書を、  
ヒッテンフェルトは軍官としての能力は高  
く評価しつつも好きになれなかったのだ。

だが、オーベルシュタインの矜持が、幼い従  
姉妹を守りきれなかったという事で傷つき  
それを回復する為に、彼に出来る事を  
懸命に二〇年の長きにわたりこなしていた  
のだとしたら…それは、武人として以前  
に、一個の人間として称賛に値する事だっ  
たのではないか？これまでと異なつたオーベ  
ルシュタインへの感情が、ヒッテンフェルトの精  
神に芽生えるのを、ヒッテンフェルトはどう  
することもできなかった。それは、あまり  
快いものではなかったが。

新帝國曆 三年（宇宙曆八〇一年）八  
月一日、先帝ラインハルト・フォン・ローエンガ  
ラムの葬儀は、簡素な中にも荘厳に執り行  
われた。

「コルデンバウム王朝の皇帝達の場合、そ  
の葬儀は幾日もかけて行われ、また、その  
費用たるや天文学的数字であったが、皇  
太后、カイザーリン・ムッター、ヒルデガ  
ルドをはじめ、國務尚書マリンドルフ伯、財務  
尚書リヒター、内務尚書オスマイヤー、民  
政尚書ブラツケ達はそれを愚とし、軍部も  
それに同意した。」

ヒルダは、国民に対し、皇帝の崩御を公  
表した折りに、大葬の日以外は、服喪する  
に及ばない旨を伝えた。一般市民の生活

が、皇帝の死によって停滞する事は、最小  
限に抑えるべきであると考えたからである。  
そして彼女の亡夫も、そう考えるはずであ  
った。

葬儀の計画の上で、一番問題となつたの  
は、墓所を何処にするかという事であつ  
た。

「皇太后陛下も、アレク陛下も、フェザン  
においてなのだから、先帝陛下の墓所はフェ  
ザンに設けるべきである。」  
とオスマイヤーは主張した。確かに、結婚  
して僅か半年でラインハルトを失つたヒルダ  
の心中を推し量れば、せめて死後はお側に  
置いて差し上げたい、と臣下の者達は思つ  
た。

然し、ヒルダは別の意見を持っていた。

「内務尚書のお心遣いは嬉しいのですが、  
私は陛下をキルヒアイス元帥のお近くで眠  
らせて差し上げたいと思つております。私  
は以前、遷都したばかりのフェザンに、グ  
リューネワルト大公妃殿下をお呼び寄せに  
なられては如何ですかと陛下に申しあげ  
た事がありました。その時、陛下は、こう  
仰いました。オーディンには、キルヒアイス  
が眠っている。死者を生者の勝手で動かす  
わけには行かない。自分もいずれオーディ  
ンに戻るつもりだ。と。もし、グリューネワ  
ルト大公妃殿下が、今後、フェザンで私  
達と一緒に暮らして下さるなら、キルヒア  
イス元帥には申し訳ない事ながら、元帥の  
墓所を移す事も考えようと思いましたが、  
姉君はアレクの戴冠式が終わつたらオーデ  
インへ戻りたいとの御意向です。ですから、  
私は陛下の墓所はオーディンに思ひます。  
大丈夫、陛下の墓所が何処にある  
うと、陛下の御心は私達と共にあるのです  
から。」

こつして、ラインハルトは惑星オーディン  
で赤毛の親友と並んで、少年の頭見上げた  
と同じ星座を天蓋に飾り眠ることになつ  
たのである。

この決定はオーベルシュタインの葬儀にも  
影響を与えることになった。大葬の翌日に  
軍務尚書の国葬は決定していた。

ヒッテンフェルトはオーベルシュタイン邸で  
再びエリザベートと対峙した。

「フロイライン・ケストナー、皇帝陛下の墓  
所は、惑星オーディンに決定致しました。  
オーベルシュタイン元帥の埋葬先はどちら  
になさいますか？元帥の遺言状には、その  
件に関する記述はありませんでしたので、  
フロイラインの御希望を伺いた。」

「…パウル兄様は、皇帝ラインハルト陛下に  
忠誠を尽くしておりました。陛下がオー  
ディンへ行かれるならば、パウル兄様もオー  
ディンに眠ることを望むに違いありません。  
ただ…ただ、陛下やキルヒアイス元帥のす  
ぐ近くではなく、少し離れた所に埋葬して  
頂けませんか？パウル兄様は、キルヒアイス  
元帥を、あの様な形で失つた原因の一端が  
自分にあつたという事を、決して忘れてお  
りませんでした。陛下に申し訳ないと思つ  
ていたのです。決して自分の意見が間違つ  
ていたとは思われないが、結果としてローエン  
グラム王朝にとって最も重要な人物を失つ  
た責任は免れないと…死んでからまで  
お二人の邪魔はしたくないと考えているに  
違いありません。私、あまり地理に詳しく  
ないので、申し訳ないのですが、そんな場所  
がありますでしょうか？」

「ライベナルトから、エリザベートの生い立  
ちを聞いていたので、ヒッテンフェルトには  
エリザベートが自分にこれだけの事を話す  
のに、どれ程、彼女自身を鼓舞せねばなら  
ないかを推察する事が出来た。」

「本当は逃げ出したいのだらうな。面識も  
なかつた男が、突然やってきて、今まで自分  
を守ってくれたパウル兄様の死を伝え、葬  
式の相談をしているのだから。全ては、パウ  
ル兄様の為…か。」  
全てはパウル兄様の為…そう思つた時、ヒ  
ッテンフェルトの胸を多状しがたい想いが刺

した。

「そつだ、この女性、ひと、はい、あいつの為  
に無理をして、この俺と話しているのだ。無  
理をして、この俺と…。」

そんな想いに、自分がとらわれたという事  
実に、次の瞬間、ヒッテンフェルトは驚愕し  
た。

「全く！何を考えているのだ！俺としたこ  
とが…！」

「場所については調べさせましよう。」  
と言いながら、慌てて立ち上がったヒッテン  
フェルトは、勢い余つて後ろへ椅子を倒して  
しまった。焦つて椅子を直そうと体をねじ  
つたところ、今度は、肘でテーブル上のコ  
ーヒカップを引っかけ、カップは床の上で  
粉々に砕けて、その中身で褐色の花を絨毯  
の上に描いた。

「あつ、も、申し訳ない！」

急いでコーヒカップの破片を拾おうとし  
て身をかがめ、今度はテーブルにしたたか  
額を打ち付けた。頭を抱えて座り込んだ  
ヒッテンフェルトを見て、びくくりした顔で  
一連の事態を見つめていたエリザベートが  
心配そうにヒッテンフェルトに近寄り、彼の  
顔を覗き込んで尋ねた。

「大丈夫ですか？」

ヒッテンフェルトは、ばつと悪そうな笑顔を  
浮かべて

「大丈夫です。良くあることです。斉射三  
連といつたところです。今日は。」

と答えながら立ち上がったが、額はまた  
ひりひりしていた。

「あら、大変、血が出ていますわ。余程強  
くぶつけられたのですね。こちらへいらして  
下さい。手直しなくては。あ、心配  
なさらないで。後片付けは私が致しますか  
ら。ライベナルト、ライベナルト、申し訳な  
いのだけども、救急箱を持ってきて頂戴。  
それと掃除道具も。」

「さあ、指示を出し、エリザベートはヒッ  
テンフェルトの額の手当をコーヒカップの

後片付けを済ませた。

「とんだ所を見せてしまつて。…コーヒータップも壊してしまつたし、誠に申し訳ない。」

と謝るビッテンフェルトに、エリザベートはかぶりを振って答えた。

「いいえ、とんでもありません。大したことがなくてよろしゅうございまして。」

エリザベートの表情は、これまでにビッテンフェルトが見てきた、緊張したものではありません。内側から自然にほころんだ柔らかな微笑みのヴェールがエリザベートの顔を包んでいた。それを見ればビッテンフェルトは、彼の心臓が急に踊り出すのを感じた。

出来る限り、普段通りの声で、ビッテンフェルトは尋ねた。

「先程の件の続きですが、もしオーディンに埋葬となつたら、フロイラインはどうなされる？オーディンまで行つて埋葬に立ち会われますか？」

「出来ましたら…。パウル兄様の眠る場所を、しっかりとこの目で確かめておきたいですし…。」

「その後の事は？」

「パウル兄様の遺言の執行もありますし、一度フェザンに戻つて来るつもりです。全ての件が片付いたらオーディンに行つて、あちらで暮らすつと考へておりますけれども、パウル兄様が、オーディンにあるオーベルシュタイン家の屋敷を残してくれましたし、ラーベナルトもこのまま私と一緒に暮らしてくれと申しておりますので。」

「こんな事を申し上げては何ですが、生活費の面で心配はないのですか？遺族年金も従姉妹まで支給されないし、財務省の奴等が言つておりました。何とかするよう、軍務省の方に声を掛けておきますが…。」

「御心配には及びません。パウル兄様が、生活に困らない程度のは準備しておいてくれましたし。それに先日フェルナー少将

がいらして、被保護者であつた事がはつきりと判れば、従姉妹にも年金が下りるよう、財務省側と話し合つたさうです。私の事だけでなく、他にもさういふ立場の方達がいるのだから仰つて、軍務省へ押し掛けたい方がいらつたやうな感じでしたが、ビッテンフェルト閣下のごことでしたのね？」

「いや、何、当然の事を言つたまでです。長く続いた戦いで、遠縁にしか頼れる者が残つていない人間は沢山います。唯一の保護者が亡くなつた時、全く生活の保障がないのでは、死んでいつた兵士に、会わせる顔がありません。」

「…。ありがとうございます。その方達の分もお礼を申し上げます。閣下は猛将と仰つておりましたけれども、お優しい方でもいらつちやいますのね。パウル兄様みたい。」

最後の一言で、再び、先程の名状しがたい思いがビッテンフェルトの胸を刺した。今度は先程より、強く深く胸が疼くのを、ビッテンフェルトは感じた。

「ビッテンフェルト上級大將の様子が変わった軍の中でさういふ風評が立つたのは八月に入つてからであつた。

オーベルシュタイン元帥の葬儀前は、皆それ程、ビッテンフェルトが、オーベルシュタインの官舎を訪れても、不審に思わなかつた。葬儀委員長としてはもつともな事と思ひ、感心もしたのである。その筆頭はワレンであつた。

「あのオーベルシュタインの為に、あのビッテンフェルトが、お役目とはいへ、よくもまあ我慢しているものだ。」

と、ワレンは、ミュラーに向かつて述べた。二人はハイネセンで、オーベルシュタインとビッテンフェルトの間に立つて苦悶させられていたので、他の僚友達以上に、事の成り行きに驚いたのである。

また、オーベルシュタインの従姉妹の為に

軍務省や財務省に掛け合つて、遺族年金が受け取れるよつにしてやつたという話を聞いた時も、僚友達はビッテンフェルトらしい義侠心の表れと受け取つた。

然し、ビッテンフェルトが、オーベルシュタインの埋葬の為に惑星オーディンまで行くと言ひ出した時は、大多数の者が首をひねつた。

「つぎ、フェザン宇宙港までオーベルシュタインの遺体を送り届けたら、御役御免と喜んで、かき消えるに違いないと踏んでいたので…。」

これは、ケスラーの感想であつた。彼は、おそらく誰も同行を望まぬであろうオーベルシュタインの葬列をオーディンまで送り届けるのは、士官学校の同期生たる自分の責務となるのではないかと密かに覚悟していたのだが、その覚悟は無駄となつた。

ミッターマイヤーは、この件に関して、「オーベルシュタインは、カモフラージュに使われたのださう。ビッテンフェルトの本当の目的は、皇帝、カイザー、に最後まで同行し、陛下の埋葬に立ち会ふことさう。」

と、バイエルラインに語つたが、オーディンにおけるビッテンフェルトの様子を、近衛隊長キスリング准将から知らされ、自分の予想が外れたらしいと悟つた。

キスリングの報告によれば、オーディンまでの星路、ビッテンフェルトは、自らの旗艦「王虎、ケーニヒ・ティゲル」にオーベルシュタインの遺体とフロイライン・ケストナーを同乗させ、自由になる時間が出るのと寸暇を惜しんでフロイライン・ケストナーの身辺にその体を運んでおり、その様子を見ていた従卒の少年は、フロイラインの顔を見なくて、ビッテンフェルト提督を見ていれば、フロイラインの表情が分かると言つたといふ。

更に、オーディン到着後、皇帝、カイザーの埋葬を終え、軍務尚書の埋葬を終えた後、軍務尚書の墓前にたずむフロ

イライン・ケストナーの後ろで、ずっと立ち尽くし、決して、フロイライン・ケストナーの警護を人任せにはしなかつた、ともつけ加えた。

「ふん、こいつは、ひよつとすると、ひよつとするのかな？ビッテンフェルトが、あのオーベルシュタインの従姉妹に。うーん、だが、どうにも、まだ信じられん。ま、さ、か、だ、な、あ、どう思う、エヴァ？」

自毛の居間で、ソファーに浅く腰掛けて、よちよち歩くフェリックスの両手を支えてやりながら、ミッターマイヤーは愛妻に声を掛けた。夫の為にいられたコーヒータップをのせて、キッチンから姿を現したエヴァンゼリンは、少し小首を傾けてから、それに応じた。

「いずれにしても、周囲がどういふ言つことではありませんわ、きつと。それに、ウォルフ、ビッテンフェルト提督は、御自分の感情を隠しておける方ではありませんもの。本当にあなたの考へていらつちやるとありなら、すぐに判りますわ。ね？フェリックス？」

エヴァンゼリンは、共和政府のキャゼルヌ夫人の様な予言者としての名声をこれまで得たことはなかつたが、今回の件では、彼女の言葉は口ならずして真実となつた。

九月一四日に、ビッテンフェルト達が惑星オーディンから帰還すると、噂は噂ではなく真実として広まり始めた。舞台となつたのは、高級士官クラブ海鷲、ゼー・アドラ

であった。

まず、ビッテンフェルトは海鷲、ゼー・アドラで、久しぶりに会つた僚友達に片っ端から、

「美味しい肉屋を知らないか？」

と尋ねて回つたのである。

「な、な、ビッテンフェルト、オーディンの肉はそんなに不味かつたのか？」

と声を掛けたミッターマイヤーの姿を認めると、ビットンフェルトはミッターマイヤーの隣の席に腰を降ろして言った。

「いや、そうではない。オーディンから帰ってみたら、オーベルシュタインの犬が弱っているな。食欲も無いよつなのだ。それで、少しでも美味い鳥肉を喰わせてやろうかと思つたのだが、何分、俺はこれまで自分で肉屋へ行つたことがないので、何処の店がいいのか判らなくて。そうだ、元帥、卿の奥方は料理上手だし、いい肉屋も御存じだろう？ 聞いて来て貰えんだらうか？」

「（こいつは本物だな。）  
と、ミッターマイヤーは一歳年長の僚友の真剣な顔を微笑ましく思い、必ず聞いて来てやるからと答えて席を離れた。海鷲ゼー・アドラーの出口の所で振り返つてみると、ビットンフェルトは、今度ばかりはアイゼナツハをつかまえて同じ質問を繰り返しているところであつた。アイゼナツハは、半ば呆れたような顔でビットンフェルトの話を聞いていたが、何回か頷いてから、ミッターマイヤーの方へ逃げてきた。そして、ミッターマイヤーと顔を見合わせると、両手を横に広げてかぶりを振り、店を出て行った。

次の日も、ミッターマイヤーは海鷲ゼー・アドラーに立ち寄り、ニコラーやビュロー、バイエルラインも一緒である。メックリンガーも後から来るはずであつた。既に店の戸隅にビットンフェルトが座っていた。誰かを待っているらしい。一〇分程するとアイゼナツハが店に現れた。アイゼナツハは、ビットンフェルトの席に歩み寄り、軍服のポケットから小さな紙切れを取り出し、立ったまま、ビットンフェルトに手渡しした。そのままくると向きを変え離れようとするのを、ビットンフェルトは首を掻んで止めた。

「待てよ、アイゼナツハ、肉屋の地図、有り難く頂いておく。礼と言つては何だが、今日は俺がおごるから、ちよつと付き合ふよ。」

（可哀想に、アイゼナツハの奴、ビットンフェルトにかまつたな。これはしばらく帰れませぬ。）

ミッターマイヤーは、アイゼナツハの迷惑そうな顔を見て心底同情した。  
おそろくビットンフェルトは、口の堅いアイゼナツハ相手なら何を話しても大丈夫と踏んだのだらう。これまでにライバルトから聞いた話や、エリザベートとのやり取りを詳しく再現し始めた。室内隅々まで聞こえる大声で……。もし、オーベルシュタインが生きてあれば、自分の私生活がこつてもあからさまにされるのを決して許さなかつたに違いない。

「とまあ、これがオーベルシュタインの執事から聞いた、あの二人の関係だ。意外だろう？ オーベルシュタインにも人間らしい感情があつたなんて、卿はオーベルシュタインの犬の話を知っているか？ まだオーディンが首都皇だつた頃、奴が元帥府の前で拾つたつていつ、あの犬だ。あは、二〇年前、フロイライン・ケストナーの家で飼われていた犬と同じ犬種なんだらう。もし、違つた種だつたら、オーベルシュタインの奴は知らん振りして通り過ぎちまつたに違いない。何でもその犬は、二〇年前の事件でフロイラインを守るつとして殺されちまつたつてな。で、あの犬を家に連れて帰つたんだが、オーベルシュタインは犬に名前をどうとう付けなかつたさうだ。二〇年前に死んだ犬の名前が、どうつても思い出せないとつてな。どんな名前だつて構わんと俺なんかは思つたのだが、アイゼナツハ、卿はどう思つ？ フロイラインの話では、あの犬は少なくとも一八歳以上ださうで、人間なら一〇歳を越えてるつてことだ。フロイラインは、名前が付いていなくて別に不便はないし、あの犬にも長い間親しんだ名前があつた筈で、あんなに年を取つてから急に別の名前と呼ばれても犬の方で迷惑かも知れないつて言つていた。どうだ？ 冷静かつ優しい意見とは思わんか？ むしろ不思議なのはオーベルシュタインの方さ。犬の名前のことくらいで、妙に感傷的だらう？ どうもあいつは、フロイラインにかかわるものを見る時は義眼を取り替えていたよつだ。ロマンチック・カラーの義眼だよ。」

「それから信じられるか？ フロイラインがあの晩、オーベルシュタインに歌つていた子守歌は、オーベルシュタインがフロイラインによく歌つてやつていた歌なのだよつだ。フロイラインは事件以来、どうも雷が苦手らしくてな。夜、雷が鳴り出すと、オーベルシュタインの部屋へ枕を持って逃げて行つたらしい。で、その時にオーベルシュタインがフロイラインに歌つてくれたのが、あの歌だつたつていつ訳だ。何だ？ アイゼナツハ？ その眼は？ 卿は疑つているのか？ フロイラインとオーベルシュタインの仲を……。まあ、俺も初めて聞いた時は驚いたからなあ。あいつとフロイラインが並んで寝ている姿なんて、気持ち悪いじゃないか？ さうだらう？ でも、この話を俺にしてくれたのはフロイライン自身なんだ。もし、そんな間柄だつたら、こんな話、逆にしてくれないだらうつてどうだ？」

「左手で頬杖を突き、右手の人差し指でテーブルを叩きながらビットンフェルトの話を聞いていたアイゼナツハは、こゝまで来たとき、右手をビットンフェルトの手に重ねて周りを見るように眼で促した。  
海鷲ゼー・アドラーの中の人間が、全員、自分の方を見ていることに気付いて、ビットンフェルトは立ち上がった。  
「な……」  
戸惑つたような表情の後、ビットンフェルトの顔は突然紅潮し、続いて蒼白になつた。  
「帰る。」

他の者達の視界から去つていった。入れ替わりに海鷲ゼー・アドラーに入つてきたメックリンガーに、ミッターマイヤーが声を掛けた。

「メックリンガー、惜しいことをしたな。もう少し早ければ、卿も興味深いものを見られたのに。」

「いや、だいたい判りますよ。ドアの外までビットンフェルト提督の聲は聞こえていたからな。元帥、それにしても、彼ほどロマンズという言葉の似合わない男も珍しい。古今東西のどんな芸術家でも、彼の恋をロマンチックに表現することは叶いませんまい。恋する相手の許へ鳥肉を抱えて通つ男など、彼くらいのもです。それも、ビットンフェルトは自分の気持ちに、また気付いていないのでしょうか？」

「そんなところだらう。とメックリンガーに同意すると、ミッターマイヤーは腕を組んで眼をつぶつた。九年近く前、彼も今のビットンフェルトと同じ様な状態にあつた。然し彼は、自分の気持ちを知つていた。判らなかつたのは、それを相手にどうやって伝えたら一番良いかという事だけだつた。でも、俺の方が奴よりは洗練されていたよつたな。と思つ。女の扱ひに長けていた親友がここにいたら、ビットンフェルトにどんな助言をするだらう？ いや、だめだ。あいつの助言なんて、ビットンフェルトの役には立つまい。それにしても、相手の女性の気持ちはどうなのだらう。何とかしてやりたいが……」

「こゝまで思いを巡らすと、ミッターマイヤーは灰色の瞳を開き、部屋の中にいた者達に今夜のことは口外無用と厳命した。

新帝国曆 三年（宇宙曆八一年）、九月一日、皇太后ヒルデガルドは先帝ライナルトの遺言により、ナイトハルト・ニコラー、フリッツ・ユゼフ・ビットンフェルト、エルネスト・メックリンガー、アウグスト・ザ

ムルワーレンス・エルンスト・フォン・アイゼナツハ、ウルリッヒ・ケスラー、この六名の上級大将を帝国元帥に叙した。ウォルフガング・ミッターマイヤーは帝国首席元帥の称号を受けた。獅子の泉、ルーヴェンブルンの七元帥の誕生である。

同時に人事の異動も発表された。国務尚書リンドルフ伯はその地位を辞し、ミッターマイヤーがその後任に選ばれた。彼は最初それを固辞したが、皇太后ヒルダから再三にわたる説得を受け、遂に首を縦に振ったのであった。軍の最高首脳が国務尚書を務めるという点からも、ローエングラム王朝初期の軍事政権としての性格がうかがえるが、これはこの時期、やむを得ないことであったかも知れない。長年の戦乱により、優秀な人材は殆ど軍部に流れており、この点では感堂ハイネセンも似たような状況であった。

ミッターマイヤーの後を受けて帝国艦隊総司令官にはミユラー元帥が、オーベルシュタインの死後、空席になっていた軍務尚書にはメックリンガー元帥が、それぞれ就くこととなった。

また、共和政府から明け渡されるイゼルロトン要塞には、司令官としてワレン元帥が入ることとなった。この人事には、実は少しばかりワレンに対するヒルダの配慮があった。ワレンは妻を失って後、一人息子を自分の両親に預けており、既に六年近くも殆ど会えない状態であった。ヒルダもこの辺りの事情を熟知しており、安心して民間人でも居住できうるイゼルロトンにワレンを送り、息子と両親の三人を呼び寄せるよう取り計らったのである。

翌九月十九日、生後三カ月半のアレクサンデル・ジークフリート・フォン・ローエングラムは、ローエングラム王朝第 14 代皇帝として至尊の冠をその頭上に戴く事となった。母親たる皇太后ヒルダ・フォン・ローエングラムの腕の中で皇帝、カイザー、アレク

はその青玉色、サファイア、の瞳を辺りに巡らせた。七元帥をはじめとする政府高官、そしてミッターマイヤー夫人に手を握られて立っている一歳年長のフェリックス・ミッターマイヤーの姿が眼に映った。彼らと未だアレクの瞳に姿を映さぬ多くの人々が、アレクの為に力を貸してくれる筈である。人類史上最大の帝国をより良き姿に作り上げていく為に。

戴冠式の翌日、ビットンフェルトは元帥となつてから初めてオーベルシュタイン邸を訪れた。海鷲、ゼー・アドラー、で、アイゼナツハ相手にオーベルシュタインやエリザベトの話をしていたつもりが、室内のもの全員に聞かれていたと知り、慌てて店を飛び出したあの日以来、エリザベトに会うていない。もう四日になる。こんなにエリザベトに会わずに過ごしたのは、七月二十七日の未明にオーベルシュタイン邸を訪れて以来初めてのことであった。

ラーベナルトからビットンフェルトの来訪を伝えられたエリザベトが、居間からドレスの裾をひるがえして迎えに出て来た。その顔はビットンフェルトを心から歓迎している旨を伝えていた。

「ああ、ビットンフェルト閣下、よくおいで下さいました。元帥就任おめでとございませう。私、少しでも早くお祝いを申し上げたくてたまらなかつたのですよ。」

「ありがとうございます、フロイライン。でも、あなたの従兄弟は皇帝ラインハルト陛下から元帥杖を下賜されたが、私はそうではありません。私は元帥にして頂く程の功績は何も挙げておりませんし、平和を迎えた今となっては、これから挙げることも叶わぬでしょう。私には元帥杖は重すぎます。」

「そんなことはありません。平和な時代には平和な時代の武人の務めがございます。少しでも平和な時代が長く続くように守

るのも大切な事ですもの。むしろ、その方が難しいかも知れません。それに武人としてはかりでなく、一人の人間として、閣下はローエングラム王朝になくてはならない方ですわ。これまでも、これからも……。」

ビットンフェルトは元帥杖を皇太后から手渡された時より、エリザベトの言葉を聞いた今の方が、胸が高鳴るのを感じた。

フロイライン、今の貴女の御言葉、小官は決して忘れません。平和な時代の武人の務め、武人としてだけではなく一人の人間としての私、そつだ、そつですとも。自分の力を全て使って、私は皇帝ラインハルト陛下の築き給つた世界を守つてみせます。」

それだけ言つと、ビットンフェルトは持つて来た包みのことを思い出してエリザベトに差し出した。

「これを天に。ミッターマイヤー夫人お薦めの店に手に入れて来ました。鳥肉です。」

「まあ、こんなに沢山、ありがとございませう。先日も頂いたのにすみません。少し失礼してよろしいですか？お肉を冷蔵庫に入れてきますわ。ラーベナルト、ビットンフェルト閣下を居間にお通しして頂戴あの……先客がいらっしゃるのですけれど、構いませんわよね？」

エリザベトの言葉に、ビットンフェルトは怪訝そつな顔をした。この家で彼以外の客になど、今まで会つたことがなかつた。そんなビットンフェルトの表情を認めてエリザベトの顔が心配そつに曇つた。

「ケスラー元帥なのですけれど、別室の方がよろしいでしょうか？」

「いや、構いません、私は……。」

どうしてケスラーが来ているのかなど、エリザベトに尋ねるのは、何となくためらわれて、ビットンフェルトはラーベナルトの方へ顔を向けた。エリザベトは、それを見て安心したように微笑み、厨房のある方へと去つて行った。その後ろ姿を見送りながら

ビットンフェルトはラーベナルトに声を掛け

た。

「おい、ケスラーの奴はよく来るのか？」

「いいえ、今日が初めてでございます。」

老執事の答えに、ビットンフェルトは強張つていた顔の筋肉から力が抜けるのを感じた。

「何だ、そつか、今日が初めてか。で、何の用で来たのだ？」

「何でも、皇太后様からの御伝言を頼まれてとの事でしたが、詳しくは存じません。それにしても、エリザベト様は変わられました。何だか生き生きしておいでです。パウル様が亡くなられた時はどうしようかと思つたものですが、閣下がいらっしゃるようになって、むしろ以前より明るくなられたように私には見えます。」

「そつか？俺には判らんが、長年みている卿がそつ思つのなら、そつかも知れんな。いい事さ。フロイラインが少しでも元気になつてくれれば、オーベルシュタイン元帥も天上、ヴァルハラ、で安心できるだろう。」

数瞬、遠い眼で壁を見つめてから、ビットンフェルトはラーベナルトの肩を軽く叩いて居間に入つて行くと、つい先刻、ケスラーの訪問を不快に感じた事などすっかり忘れて、ソファアーに腰を降ろしている僚友に声を掛けた。

「よお、ケスラー元帥、こんな所で会つことはな。皇太后陛下のお使いだそつだが、一体どうしたんだ？」

「うむ、ビットンフェルトが、卿の声は相変わらず大きいな。邸内に入つてからの卿の台詞は全部聞こえていたぞ。皇太后陛下からの御伝言は、オーベルシュタインの葬儀も終わったし、落ち着いたら一度仮皇宮にいらつちやいとつとさ。フロイライン、ケストナーは、ヴェストバーレ男爵夫人の学校で皇太后陛下と一緒だつたそつではないか？まさか、オーベルシュタインの従姉妹だつた

とは、皇太后陛下も御存知なかつたよつたがな。まあ、俺は毎日、仮皇宮に顔を出すし、オーベルシュタインとは千吉学校で同期だったといふ縁もある。それで陛下に頼まれたつて説法、安心しろよ、俺はこれで帰るから。」

「おい、卿はまた用が残っているのではないのか？用が無いのに長居するよつな卿ではあるまいがさっき、俺の話は全部聞いていたと言つたな？俺が執事に卿のことを尋ねたのが気になつてゐるのか？気にするな、そんなこと。しつかり用件を済ませてから帰れよ。」

「うむ、実はミッターマイヤー元帥からもフロイラインにひとし聞いてきて欲しいと頼まれたことがあつたのだが、さっきの会話で判つたからもういい。そうだ、ビットンフェルト、卿と少し話したい事がある。俺の地上車、ランド・カー、はもう返してしまつたし、卿の地上車、ランド・カー、で送つて貰えんか？」

「えつ、（ここでは話せない事なのか？俺は今来たところだぞ。」

ビットンフェルトは抗議の意を込めてケスラーに答へた。

「判つてゐるさ、そんなに遠くまでではない俺を送り届けたら、もう一度戻つてくれれば良いではないか。時間はあるのだから？」

「それはそうだが…。」

二人の元帥が地上車、ランド・カーの使用をめぐつて押し問答をしてゐるところへエリザベートが入つて来た。

「あら、どうなさつたのですか？」

ケスラーが答へた。

「フロイライン、申し訳ありませんが、小官はこれで失礼致します。ビットンフェルト元帥が地上車、ランド・カー、で送つてくれるそうです。」

「おい、ケスラー、俺はまだ承知しておらんぞ！」

エリザベートも懇願するよつに言った。

「あの…美味しいお肉が沢山あつたので、今、フリカッセを作つてゐるのです。どつかがそれを召し上がつてからお帰り下さい。もうすぐ出来上がりですから…。ワインも冷やしてありますし…。」

「いや、フロイライン、実は今夜は約束がありまして、食事もそちらで取る事になつてゐるのです。御心配には及びません。ビットンフェルトはすぐにこちらへ返します。どうか、私の分もビットンフェルトに喰わせてやつて下さい。」

ケスラーのこの言葉を聞いて、ビットンフェルトは僚友の言つたことを聞いてやることにした。

地上車、ランド・カー、の中で先に口火を切つたのはビットンフェルトであつた。

「さあ、ケスラー、話といふのは何だ？早く言え。」

「うむ、ビットンフェルト、卿はさっき俺がフロイライン・ケストナーを訪ねたと知つてどう感じた？何を考えた？正直に言つてみる。」

「え、何を？…うん、そうだな、怒るなよ、ケスラー。正直言つて俺は面白くなかつた、卿とフロイラインがどんな關係なのか気になつた。そして、そんな自分に気が付いて腹が立つた。そんなところだ。」

「そつが…自分に腹が立つたか…卿は本当にいい奴だな。」

「何だ、気味が悪いな。誉めても何も出ないぞ。」

「卿は自分の気持ちに気付いてゐるか？」

「何？どつちの意味だ？」

「どうして面白くなかつたか、どうして俺とフロイラインの關係なんかが気になつたか、その訳だ。」

「訳だ？」

「そつだ、卿の感じたものを人がなんと呼ぶか知つてゐるか？そいつは、嫉妬、といふんだ。」

「嫉妬だ！馬鹿言え。何で俺が卿に嫉妬するんだ？」

「それは、卿がフロイライン・エリザベート・フォン・ケストナーに恋してゐるからさ。」

ケスラーのこの言葉は、ビットンフェルトに取つて思ひがけないものであつた。

「…恋？…恋だ？…この…の俺が？…貴様、何抜かす！言わせておけばいい気になりやがて…！」

ビットンフェルトは、地上車、ランド・カーの中だといふことも忘れてケスラーにツツンフェルトの手首をひねり上げ、もう一度ビットンフェルトを座席に座らせた。

「そつだ、恋だ。卿は今、恋をしてゐる。」

「馬鹿な！何でこの俺が恋などするか！そんな女々しいこと、考えたこともない！！！」

今度はケスラーが驚く番であつた。

「ビットンフェルト、卿、今何と言つた？恋愛は女々しい、そう言つたのか、卿は？」

「当たり前だ！！！」

成る程な。そつ考えていたのは自分の気持ちに気付かぬのも無理はない。」

こつ言つてケスラーは嘆息した。それからビットンフェルトの方に向き直り、しつかりと顔を見つめると再び口を開いた。

「ロイエンタールは赤髪を男だつた、あいつを女々しいと思つたか？」

「ふん、ロイエンタールは恋愛なんかしたことは一度だつて無かつた。俺はあいつを士官学校の時から知つてゐる。あいつのしていたのはな、恋愛ではなくて漁色というのだ！」

「では、ミッターマイヤー元帥はどうだ？元帥は夫人に7年間恋い焦がれた末に求婚した。今でも夫人に恋し続けている。女々しいと思つたか？」

「…いや、思わない。」

「それ見る、なあ、ビットンフェルト、恋愛を自分で決めて女々しいものではない。問

題となるのはどんな恋愛をするかだ。ビットンフェルト、いい恋愛をしろ、卿らしい恋愛を。その恋が美を結ぶつて結ぶまいと後から振り返つて自ら恥じることはない恋をするんだ。俺が卿に言いたかつたのはそれだけだ。あつ、ここでいい、降りしてくれ。」

ケスラーはレストランやカフェが立ち並ぶ繁華街の二画に、地上車、ランド・カーを止めさせた。地上車、ランド・カーから降り、ドアを開めながら、ビットンフェルトにもう一度声を掛けた。

「いいか、フロイラインの所へ必ずもどるんだぞ。フリカッセが冷めないうちにだ。いいな？俺のことを嘘つきにはせんぞ。いいよ…ビットンフェルト、いい恋をしような。」

地上車、ランド・カー、のドアが開まり反対方向へリターンしてから、ビットンフェルトは今のケスラーの言葉を反芻した。

（いい恋を、し・よ・う・な、だど？）

思わずリア・ウインドー越しにケスラーを見ると、謹言実直な憲兵総監は、こちらに向かつて手を振つてゐた。お義理に手を振り返して前に向き直らつとしたビットンフェルトは、

「大佐さーん！！！」

と叫びながら前方より駆けて来た黒髪の少女と、サイド・ウインドー越しにすれ違つた。その隣に、ビットンフェルトは確かに見覚えがあつたのだが、どこで会ひ、何といふ名前だつたか、遂に思い出せなかつた。

ケスラーと別れ、オーベルシュタイン邸へ戻る途中、ビットンフェルトはさつとケスラーの言葉を思い出してゐた。自分が恋をしてゐるといふのは、にわかには信じられない事であつた。彼はこれまで、ケスラーに述べたとおり、恋愛は自分に相応しくない行為であると信じ行動してきたのである。

けれど、決して女性と關係が無かつた

わけではない。士官学校の学生だった頃から、度々、悪友達と乱痴気騒ぎを起し、朝、見ず知らずの女性。おそろく前夜の酒場にいた女性のうちの一人

のベッドで目を覚ました事も一度や二度ではなかった。そんな行状を眉をひそめて見る者も上官の中には多かった。帝国軍士官たる者、もっと品位ある行動を、というのである。然し、逆に下士官以下の者達からは好かれた。上品ぶらず、自分たちと一緒に騒ぐ陽気で豪快な若き上官は、彼らの代表としての地位を確立していったのである。獅子帝ラインハルトとその麾下の将帥の中で、ビッテンフェルトは、皇帝自身と双璧の次に、鉄壁ミユラーと並んで兵士達に人気のある指揮官であった。

ビッテンフェルト自身、そんな自分のありようを見とてきたし、変えたいと思ったことなどなかった。同期のロイエンタールや一期下のミッターマイヤーが、攻守ともに優れた名将として名を成し、自分の遙か前方を歩むことになっても、二人の将才を高く評価しこそすれ、一人の真似をしようと思つたことはない。あいつらはいつら俺は俺という気持ちが強かった。

だが、今、ビッテンフェルトは急に不安を感じ始めていた。女性に恋することにより、自分がこれまでの自分ではなくなつてしまつたのではないかという不安であった。

そんな畏れにも似た感情を胸に抱いたまま、ビッテンフェルトは再びオーベルシュタイン邸の門をくぐり、エリザベートやラーベナルトの歓迎を受けた。あの犬さえ、暖炉の前で身を起し、尻尾を振つてみせてくれた。

白ワインとフリカッセ、チシャのサラダの並べられた食卓に案内されたビッテンフェルトは、どの様な状況においてもその影響を受け付けない鉄の胃袋に、グラスと皿の中のものゝ次々に放り込んでいった。その健

啖ぶりに驚きながらも、エリザベートは嬉しそつに、おかわりを彼によつて、幾度も厨房と食堂の間を往復した。

何度目の給仕の後、エリザベートは申し訳なきそつにビッテンフェルトに言った。「御免なさい、これで最後なんです。もし、まだ足りないよつでしたら、何か別のものを用意しますけれど……いかがですか？」

「いや、もう結構、十分過ぎるほどです。いやあ、フロイラインは料理の達人でいらつしやる。こんなに美味いフリカッセはミッターマイヤー、元帥の家で食べたぶり喰つていたのにな、こんなに美味いものをたうぶり喰つていたのにな、どうしてオーベルシュタインの奴はあんなに顔色が悪かつたのだらう？」

「言つてしまつてから、ビッテンフェルトはじまつたと思つた。  
（従兄弟の悪口と受け取られなかつただろうか？）

然し、エリザベートはそつとは受け取らなかつたよつであつた。彼女は彼女にしては珍しく、はつと悪そうな顔をして、こつ答えた。

「あの……パウル兄様は、私の作つた料理を食べたことなど一度もありません。これまで、私、自分の部屋に閉じこもつていて、とが多くて、お料理を作ることなどありませんでしたから、このフリカッセも白状しますと、今日初めて作つたのです、本を見ながら、ラーベナルト夫人にも教えてもらつて……」

「お口に合わなかつたらどうしようかと心配だつたのですけれども、喜んで頂けて、とても嬉しいですよ、閣下。」

「初めて……では私が最初なのですか？フロイラインの手料理にありついたのは……」

「ええ……ええ、そうなりますわね。」

「フロイライン、先程、私はフロイラインを料理の達人と申し上げましたが、訂正します。フロイラインは料理の天才でいらつしやる。」

ビッテンフェルトは胸の中で何かが飛び跳ねているよつとなくすくつた。想いを感じながら、改めてエリザベートの料理の腕を称賛した。この感じ、これも恋の症状なのかも知れないが、本心に俺がフロイラインに恋しているのなら、エリザベートの嬉しそつな笑顔を見ながら、ビッテンフェルトの頭をそんな考えががすめて行つた。

数階階後、ビッテンフェルトは、宿舎となつてゐるホテルの一室で、ベッドの上に仰向けになつていた。彼が見据えていたのは天井ではなく、自分自身の気持ちだつた。

（もし俺が、ケストナーの言つとおりフロイライン・ケストナーに恋愛感情を抱いていたら、それによつて俺が俺でなくなるというこゝとはないだらうか？現にこの所、俺は今までに経験したことのない気分程度々おそわつてゐる。今日など、ケストナーにどうも嫉妬したらしい。フロイラインに一度と会わずにおいたらどうだ？いや、四日間会わなかつただけで、あんなに空虚な気分を味つたのだ。ぼつとしてゐる俺など、俺ではない。ああ、もつ、分からん！）

元々、ビッテンフェルトは一人で考え込むのは得意な方ではない。彼の思考は、どちらかと言へば極めて直感的なもので、一瞬の決断を迫られるような場合には凡人の遠く及ばない処のもののだが、ひとたび袋小路に迷い込み熟慮を必要とする局面に陥ると、一人で考えをまとめるのは至難の技であつた。このよつな時、彼は自分の寡僚たちと意見を交換しながら、自らの頭の中にあるおぼろげな思考を具体化することが多かつた。良い話し相手があれば、ビッテンフェルトは自分の思考力や想像力を何倍にも増幅可能であつた。戦闘においては、その聞き手は黒色騎騎兵艦隊、シユワルツ・ランツェンレイター、副司令官ハルバシュタット大將や参謀長グレーブナー大將でもよかつたのだが、今回のよつな問題で

は、彼らには、はつきり言つて當てにならなかつた。

（あいつしかあるまい。）  
ビッテンフェルトは部下の中で最も優秀な増幅装置である男を呼ぶことにきめてから、眠りに落ちたのである。

次の日、副参謀長オイゲン少將はビッテンフェルトから執務室まで来るよつ命じられた。オイゲンは従卒の少年に他の者は誰も入室させないよつ命じて、それから思い出したよつに付け加えた。

「お前にも自由時間をやるよつ。一時間位外へ行つて羽を伸ばしてこい。一時間でも構わんぞ。そつだ、小遣いをやるから何か美味いものでも食つて来るよつ。」

顔を輝かせて飛び出していく少年を見送つてから、ビッテンフェルトはオイゲンにソファに腰掛けるよつ指示し、自分も執務席の椅子に深々と腰を下ろした。

「なあ、オイゲン」  
「はつ、何でありましようか、閣下。」  
「卿はどう思つた？ケストナー元帥によれば、俺は今、恋をしてゐるのだそつだ。」

「フロイライン・ケストナーのことでございませうか？」  
「何故知つてゐるのだ？」

「それはもつ。恐れながら、小官はかりでなく、艦隊の者は全員存じております。おそろくは他の部隊の者も。」

「他の部隊の連中もだつ？」  
「はい、海鷲、ゼー・アドラー、での一件はミッターマイヤー元帥が箱口令を敷かれたにもかかわらず、全軍に知れておりますので。」

「ビッテンフェルトは嘆息した。  
「やれやれ、知らなかつたのは俺だけか。間抜け以外のなにもでもないな。」

「けれど閣下、閣下がフロイライン・ケストナーにお心を配られたのは当然です。保護者を失つて傷心の女性に冷淡に接する

よつな輩は、男の風上にも置けません。その点、閣下の態度は美に御立派でいらつしやいました。小官は閣下の下で働けることを誇りに思っております。また、フロイラインも閣下の御厚意を受けるに相応しい女性とお見受け致しました。今回のオーディン行きに同行致しております。将兵の中でお二人のお姿を好意的に見ない者などありませんまい。」

それを聞いて、ビッテンフェルトは自分がまだ兵士達の信頼を得ていることを知り、最大の懸念を払拭する事が出来た。

「オイゲン、俺はこれからどうしたらよいと思つて？」

「ここが肝心なところだ。ビッテンフェルトは思つた。だが、オイゲンの返答はあつけない程、簡単であつた。」

「これまでどおりでよろしいではありませんか？」

「そうですね。閣下、これまでどおり、フロイラインのお力になって差し上げればよろしいではありませんか？フロイラインは閣下のような方の助けをまだ必要としておられます。閣下もそんなフロイラインを放つてはおけませんまい。恋だの愛だのはこの際考えず、これまでどおりのお付き合ひを続けられるが良いかと小官は考えます。言いたい者には言わせておけばよろしいではありませんか？」

「このオイゲンの進言はビッテンフェルトの心を軽くした。そつだ、俺は俺だ。他の奴らが何を言おうが構わんではないか。今までどおりの俺で行こう。もう、迷いはなかった。」

オイゲンの進言を受けたあの日以来、ビッテンフェルトは堂々とエリザベートを訪ね、僚友達にその事を揶揄されても堂々と受け流し、ミッターマイヤーに言わせれば、堂々とるけるよつになつた。いかにビッ

テンフェルトらしく。

ただ彼自身には自覚が無かつたかも知れないが、周囲の者にはビッテンフェルトが少しずつ変わつていくように思われた。彼はオーベルシュタイン邸にエリザベートを訪ねただけではなく、彼女を外へ連れ出すようになった。エリザベートが喜びそうな場所をラーベナルトから聞き出すと、まるでいたずらを企む少年のように秘密裡に計画を立て、突然エリザベートを邸外へさらつて行くのである。そして、その「場所」の多くが、いかにビッテンフェルトに似つかわしくないものであつた。いつの間にか、オレンジ色の髪のエリザベートと純白の髪のお嬢さんの姿は、音楽会の常連になつていた。もつとも元帥の方は演奏の間、ずっと夢の小舟を漕いでいるといふもつぱらの評判であつたが、彼らと度々音楽会の会場で顔を合わせたメツクリンガー元帥は、ヴェストパーレ男爵夫人に書簡の中でこのように述べている。

「全く芸術とは無縁にみえたビッテンフェルト元帥が、このような場所へ自ら望んで足を運ぶ日が来ようとは考えてもありませんでした。しかも彼はいびきをかかなくなりました。まさしくこれは芸術の女神の為せる奇跡と申せまじやう。」

変わったのはビッテンフェルトだけではなかつた。エリザベートもビッテンフェルトに引きずられる形で変身せざるを得なかつたのである。

「ビッテンフェルトはエリザベートを偏病兵のためのチャリティー・コンサートで歌つように仕向けた。」

「フロイライン、貴女の従兄弟、オーベルシュタイン元帥は軍の重鎮だつた。縁者である貴女にも傷病兵達の為に何かする義務があると思つたのだが……どうだ？一曲歌つてみては？」

一度だけならと覚悟を決めて舞台上に上つた彼女だつたが、一度が二度、二度が三度になり、いつしか彼女は、こつこつと僅し

の運営にまで名を連ねる事になつてしまつた。

またビッテンフェルトは、

「皇太后陛下がフロイラインにお会いになりたいそつだ。」

と言つて、度々エリザベートをヒルダの許へ連れて行つた。初めてウエルゼーテ仮皇宮にエリザベートが参内し、ヒルダと何年かぶりの再会をした時、ヒルダはエリザベートに向かつて言つた。

「しばらくね、フロイライン・ケストナー。貴女がオーベルシュタイン元帥の従姉妹だつたなんて驚きました。覚えていますよ。学校で、他の人達が宝石や服や花や馬の話をしてる時、貴女はいつも本を読んでいたわね。貸し出しカードに貴女と私の名前しか書いてない本が図書館に何冊あつたことが、学校ではあまりお話をする機会があまりませんでしたけれど、これからは時々一緒に時間を持たせたいと思つて居るの。承知して頂けるでしょうか？アレクに何等な友人が必要ないように、私にも立場を離れた友人が何人か必要なのです。ハイネセンにも一人います。フレデリカというの。主義・主張は違つけれども素敵なひとです。直接会う機会がなかなか無いのが残念ですけれども、超光速通信 F・T・L で時々話しているのですよ。そんな友人に出来れば貴女にもなつて頂きたいのです。お願いできますか？」

こうして、エリザベートはヒルダの話し相手も務めることになつてしまつた。そして、この事が歴史にいくらかの影響を与えることになる。後世の歴史家は言つた。

「エリザベートとの会話から、皇太后ヒルダは幾つかの政策を立案した。その多くは生活レベルの細かな問題に關わるものであつた。それが実際に施行された時には、それ程人民の生活に大きな変化があつたようには見えなかつたが、幾年かの歳月を経て、国民は二人の女性の識見の確かさに感謝す

る事となつた。」

尚、エリザベートのこの変化は、後世の心理学者や教育者達にとつても興味深いものであつたらしく、何人かの人物が彼女について書いて居る。彼らが一致して述べているのは、エリザベートの能力が発揮されるにはビッテンフェルト元帥の存在が必要であつたといふ点である。ただ、ここで問題となるのはオーベルシュタイン元帥の存在である。彼に対する評価は幾つかに分かれて居る。

ある者は言つた。

「オーベルシュタインが生きていれば、エリザベートはビッテンフェルトを必要としなかつたであろう。おそらく賢明なる年長の従兄弟に導かれ、同じ結果を得られたに違いない。」

また、別のある者は言つた。

「オーベルシュタインは、むしろエリザベートにとつて、少なくとも不幸な事件の直後以外は無害であつたのではないか。彼の存在はエリザベートを過度に保護し、社会と隔絶させる方向に働いていたのではないか。その為にエリザベートは四歳の折りの不幸な事件から立ち直るのが遅れたのである。」

更に別の研究者はこつこつ述べて居る。

「エリザベートは最も理想的な二人の保護者の連携によつて作り出された奇跡の人である。四歳から二四歳の夏までのエリザベートに必要であつたのは、オーベルシュタインのような人物の細心の注意を払つた精神的ケアであり、それによつてエリザベートの精神は従兄弟の死亡時、既に十分な修復が氣付かぬうちに完了されていた。それを彼女に氣付かせ、更に活性化させたのがビッテンフェルトであつた。」

いすれにしても、エリザベートにとつて傑出した人物が何名も周囲に存在していたという事は幸運以外の何者でもなかつた。

新帝國曆 四年(宇宙曆八二一年)の晩秋、ビッテンフェルト元帥は数日間、わた

つて機嫌が悪く、部下達は気を遣つてくれた。オイゲン中将にはその理由が判つていた。

ビッテンフェルト元帥が停滞性低気圧化したその日、フロイライン・ケストナーがビッテンフェルトにオーベルシュタイン元帥の遺言の執行も全て終了したので、年内にもオイゲンへ去る旨を伝えたのである。

「フ、フロイライン、何もオイゲンに行かずともよいのではないか？ 皇太后陛下も寂しがられようし……。」

「いいえ、その言ひ訳にも参りません。今の住まいは官舎です。御厚意でパウエル様様の死後も住まわせて頂きましたが、いつまでもそれに甘える訳には参りません。ヒルダ様とは、手紙でも、超光速通信 F・T・L でも連絡できませぬわ。」

「だが、官舎を出ねはならぬにしても、どこ別の住まいに移れば済むではないか？」

「ええ、でも、オイゲンに家があるのですか。私の場合、どうしてモエザインに住まねばならない訳ではありませんも。フエザインで家を置つたり、借りたりするのは無駄になります。」

「経済的なことなら、俺がなんとかしていい。」

この言葉にエリザベートは誇りを傷つけられたようであった。

「だめです、そんなこと。そこまで閣下は面倒を見て頂く理由はありません。それに、お金のことなら閣下のお陰でパウエル様様の遺族年金も頂けるようになりましたし、何の心配も無いのです。閣下、閣下にはこの一年あまり、本当に良くして頂きました。私、幸せでした。閣下がいらつしやるだけで楽しかった。どうか、良い思い出のまま、オイゲンへ行かせて下さい。」

「フロイライン、フロイラインは……俺と会えなくなつても平気なのか？ その方がいいのか？ 俺は、俺は……」

俺はフロイラインと離れたくない……そう

言ひかけてビッテンフェルトは言葉を呑み込んだ。あまりに大人げないように思えたからである。然し、胸の中に暗雲が垂れ込め、抜がっていくのはどうすることも出来なかった。

「もしかしたら俺はフロイラインに嫌われてしまったのだらうか？ どうしたら良いと思つて、オイゲン？」

翌日、ビッテンフェルトは執務室へオイゲンを呼んで前日の様子を語り、助言を求めた。だが今回、オイゲンは即答出来なかつた。事態は微妙な状態にあるようであつた。オイゲンにはビッテンフェルトの気持ちは自分の気持ちと同じ位判つているつもりであつたが、エリザベートの気持ちは、ビッテンフェルトの話から推し量るしかなく、真意がどこにあるのかが自信がなかつたのである。

あれからもう一週間以上になるが、ビッテンフェルトはエリザベートに一度も会つていないようであるし、オイゲンの知る限り、フロイライン・ケストナーからもビッテンフェルトに何の連絡も無いようであつた。オイゲンの目には、彼の上言と純白の髪のお嬢さんはずでにお互いの存在無しにはあり得ないように映つていた。もしこのままフロイラインが惑星オイゲンへ去つてしまつたようなことになれば、二人は永遠に自らの半身を失つことになるのだらう。

（何とかして差し上げたいものだ。）

オイゲンは、眉間にしわを寄せている上言の顔を見ながらそう思つた。

同じ頃、オイゲンと同様にビッテンフェルトとエリザベートのことを気に病んでいる老人がいた。彼はオーベルシュタイン家に元帥の父の代から仕立てている執事でラーベナルトといふ。

ラーベナルトはオイゲンよりも少し詳しく二人の気持ちを知つていた。というより、エリザベートの気持ちを知つていたのである。彼は常にエリザベートの近くにあってその様子を幼い頃より見てきたので、僅かな挙動の変化さえも見逃しはしなかつた。彼の見た所、エリザベートは決してオイゲンへ帰らなかつたことになかつた。本日はフエザインに、いや、あのオレンジ色の髪をした提督の近くに居たいのだ。

「然し、彼女の「理性」は、従兄弟の遺言の執行も終わった以上、官舎を出るべきだ。」

と告げた。

「出て何処へ行くの？」

という彼女の「感情」の質問にも「理性」は無慈悲に答えた。

「フエザインに居なくてはならない理由が無い以上、オイゲンへ帰るべきだ。」

と、エリザベートは、彼女の従兄弟と同様に、感情より理性を優先するタイプの間であつたから、オイゲン行きを拒否する正当な理由が見つからぬ限り、「感情」は白旗を挙げる以外なかつた。

ビッテンフェルト閣下が、あの時言わずに呑み込んだ言葉を、あのまま続けて言つていたら、それはきつと「正当な理由」といふ強大な援軍となつてエリザベートの「感情」に「理性」を屈服させ得たのだ……と、あの日、ラーベナルトは、肩を落として帰つて行くビッテンフェルトを見送りながら思つたものである。

ラーベナルトは、初めてビッテンフェルトと会つた頃、実を言つとあまり好意的な目で彼を見ていたわけではなかつた。無教養で粗野で騒々しい、彼の亡き主人とは正反対の男に見えたからである。ところが何となく、エリザベートはラーベナルトの予想に反してビッテンフェルトを信頼し、彼の亡き主人以外には見せようとしなかつた精神的素顔をビッテンフェルトに見せるようにさせた。この時点で、ラーベナルトはビッテンフェルトに対する自分の評価を大修正した。彼は亡き主人の、エリザベ

トを守り幸せにしたい、という想いを知つており、その想いを継ぐ者としてビッテンフェルトを選んだのである。今、彼はビッテンフェルトの恋の最大の協力者であつた。（エリザベート様がオイゲンへ立たれる前に何とかしなくては……）

老執事は思案を巡らせたが、いい考えは出てこなかつた。もうあまり時間は残されてない。

ビッテンフェルトの宿舎であるホテルの一室に、ラーベナルトからのTV電話、ヴィジホンが入つたのは、一月四日の夜のことであつた。

「ラーベナルト、一体どうしたのだ？」

「申し訳ありません。私などが直接閣下に連絡を取るなどは失礼な事と思つたので……。」

「そんなことは構わぬ。何だ？ 早く言え。」

「実は閣下に是非来て頂きたいと存じまして……。」

ラーベナルトはやや早口に次のことを話した。

「オーベルシュタイン家で飼つている例の犬が最近益々弱つて来ていた。ここ三、四日前からは立つて動くことも出来なかつたが、それが今朝からいよいよ危ない。午前中に一度獣医に来て貰つたのだが、先程から折癒の発作を起こし始めた。再び往診を請おうとしたが獣医が外出中で連絡が取れない。老人とはいへ、大きな体なのでエリザベートや自分だけではとても手に負えず、どうか助けて欲しい。エリザベートなど今朝からパン一切れ、コーヒ一杯口にせず犬に付き添つている。」

ここまで話して、ラーベナルトはTV電話、ヴィジホンの画面の中で向こうの様子をつかがつた。

「また痙攣のようです。私も犬のところへ戻つて差し上げないと……。どうか、お願い致します。」

画面が消えた。

「ビットテンフェルトは腕組みをして、一瞬何か考えたようであったが、すぐに手に小さな包みを持って部屋を飛び出した。ホテルの外に出ると、空は厚い雲に覆われており、遠くで雷鳴もしていた。(こいつは嵐になるかも知れんな。)

地上車 ランド・カー を走らせながらビットテンフェルトは思った。

「(〇分後、ビットテンフェルトはオーベルシュタイン邸の玄関の前に立っていた。実に半月振りである。ビットテンフェルトの予想通り天候は悪化の一途をたどり、雷鳴と雨は激しさを増しつつあった。呼び鈴を鳴らした。

「初めて来た日に似ているな。あの日は嵐の後だった。(

「良く来て下さいました。」

あの日と同じようにラーベナルトがドアを開け、邸内へ招き入れてくれた。かなり疲れているように見える。

「犬は？」

「ビットテンフェルトが尋ねると、ラーベナルトは無言で首を横に振った。

「いつだ？」

「先程、閣下にTV電話、ウィジホンを差し上げた後、すぐでした。」

「そっか？フロイラインはどうしている？」

「あちらの部屋で犬に付いておいでです。」

ラーベナルトが指した部屋からは、あの日ヴェルゼーデ飯皇宮で聞いたのと同じ歌声が聞こえてきた。

「行って差し上げて下さい…お願い致します。」

ラーベナルトに促されて、ビットテンフェルトはその部屋に入った。動かなくなった黒と白の斑の体を、エリザベートは優しく撫でていた。ドアの閉まる音でエリザベートは振り返った。

「閣下、どうして？」

「ラーベナルトが知らせてくれた。大変だったと聞いた。すまなかつたな、肝心の朝、雨が上がってから俺が埋めてやる。ちゃんと暴を作ってやらないな。」

それともオーティンまで連れて行って、オーベルシュタインの近くに埋めてやるか？それなら、冷凍保存用のカプセルを手配するが…。」

「……」

エリザベートの返事が無いのは、彼女がまだその件について決断を下していない為と判断して、ビットテンフェルトは続けた。

「まあ、今すぐ決めなくても大丈夫だ。明日の朝までに決めればいいのだから…。それより、まず何か腹に入れた方がいい。ラーベナルトが心配していた。朝から何も食べていないそつではないか。いかなな、そついうのは、どんな時でも、何が食べておかんと体に悪い。」

「こつ言つと、ビットテンフェルトは持って来た包みを開いて、中のもを出した。

「もつと、気の利いたものと思つたのだが、思い付かなくてな。これなら、犬を看ながらでも食べるからと思つて持って来たのだ。俺の非寛食さ、王虎、ケーニヒ・ティール、の艦橋で指揮を執りながら腹が減つた時に、良くこいつをかじるんだ。」

それはポイルしたフランクフルト・ソーセージだった。まだ温かみが残っていた。全く散文的で、実用一点張りの差し入れであったが、エリザベートにはビットテンフェルトの不器用な思いやりが、ソーセージの温もりとなつていのように感じられた。

「マスタードをたっぷり付けると美味い。一緒に持つて来たから使つていい。」

「ありがとこつございます。」

ビットテンフェルトが、チューブに入ったマスタードをソーセージにたっぷり付けて、エリザベートに手渡そつとした時だった。すぐ近くに落雷したのだから、閃光、それに数

分の一瞬遅れて、一際大きな雷鳴が二人を襲った。

「……」

「……」

ビットテンフェルトは思わすよめいて、ソーセージとマスタードの容器を取り落とした。エリザベートが軍服にしがみついている。ビットテンフェルトは、まるで壊れやすい卵の殻で作られた置物でも抱えるように、そつと自分の両腕を彼女の背中にまわした。彼女の体が小さく震えているのが判った。

数瞬の後、その震えが収まり、エリザベートは自分が両手でビットテンフェルトの黒と銀の軍服を握りしめていることに気が付いた。

「すみません、取り乱してしまつて、ごめんなさい。」

慌てて体を離そつとしたが、今度はビットテンフェルトの腕がエリザベートを放さなかつた。

先程の落雷による停電で室内の明かりは消え、時折空を駆ける稲妻の光で青白く照らし出されるその一瞬以外は、闇が室内を支配していた。

もし、もつと明るい場所であれば、エリザベートはビットテンフェルトの顔がその髪より濃く朱に染まっていることや、その瞳が決して彼女の顔を見ようとしないうと、唇も何かを語りかけては、すぐに固く結ばれ、何かを逡巡していることに気が付いたに違いない。

然し、殆ど暗闇に近いこの状態では視覚は役に立たず、エリザベートは視覚以外の感覚が逆に研ぎ澄まされていくのを感じた。

ビットテンフェルトのいつになく不規則で苦しげな息づかい、つばを飲み込む音、そして、自分のそれと比べ、ずつと大きくなって力強い鼓動。軍服の香りも彼女の知っている従兄弟のものとは違っていることに、エリザベートはこの時初めて気が付いた。

「フロイライン」

意を決したように、一つ大きく深呼吸をして目を閉じると、ビットテンフェルトはエリザベートの耳元で唇を動かした。エリザベートは一瞬大きく瞳を見開き、それからゆつくりとつむいた。唇の動きが止まった時、二人は二人だけの世界にいた。雷鳴さえもその世界には入ることを許されなかつた。エリザベートの純白の頭が上下に揺れるのを自分の胸に感じて、ビットテンフェルトは大きく息を吸い込んだ。気がかぬうちに息を止めていたのである。開放感と幸福感がビットテンフェルトを満たしていった。

数瞬の間があつて、ビットテンフェルトはエリザベートの顔を上向かせると、ややぎこちなく接吻した。エリザベートは最初、体を固くしてそれを受けていたが、やがて少しずつ体が力をぬき、ビットテンフェルトの胸に顔を埋めた。

もし、ビットテンフェルトの僚友達がこの場に居合わせたならば、きつこつ言つて驚いたに違いない。

「ビットテンフェルトにささやくなんて苦当ができたのか？」

と、幸いなことに、口の悪い僚友は一人も同席を許されなかつた。

然し、いつも部外者とか目撃者という者は存在するもので、この時その当番に当たつたのはラーベナルトであった。ラーベナルトは停電で明かりが消えてしまい不便であるうと非常灯を一人のいる部屋へ持つて来たのである。ノックはしたが、おそらく雷鳴の為に中にいた二人は気が付かなかつた。ドアを開けたラーベナルトの目に飛び込んで来たのは、稲妻の青白い光に浮かび上がった、二人の抱き合う姿であった。ラーベナルトは音を立てぬようにドアを閉め、引き返した。

居間の壁に掛けられた幾つかの額縁

そのうちの二つをラーベナルトは壁から

外して見つめた。額縁のガラスの向うに居るのは、黒っぽい髪と薄茶色の目をした士官学校の生徒で、タークグレーの髪と蒼みがかった灰色の瞳の三歳位の女の子を抱いていた。

ラーベナルトの記憶が二〇年以上遡る。少年っぼさの残る声がある。

「エルザ、エルザ、幸せになるんだよ、うんと幸せにね。お前の為なら、僕はどんな事だつてしてあげるからね、エルザ。」  
「パウエル様、よろしくうさいます。あなたの方ならば、きつとエルザベート様を幸せにして下さいますよ。」

ラーベナルトの両眼から熱いものが溢れ、ガラスの上に温かな水滴が転がった。

あの風の夜から三日経って、ビッテンフェルトとエリザベートは、揃って皇太后ヒルデガルドの許を訪れた。二人の婚約の報告を受けて、ヒルダは心からの祝辞を述べた。  
「お二人とも、本当におめでたうさいます。こつななは良いと思つていたので、ビッテンフェルト元帥、エルザは私の大切な友人です。どうか大事にしてあげて下さいね。エルザ、ビッテンフェルト元帥は帝国にとつて無くてはならない方です。どうか良く助けてあげて下さいね、貴女なら出来るわ。」

この時、エリザベートはオーベルシュタイン元帥の遺族年金の受給資格を返還する旨を申し出ている。

「ビッテンフェルト元帥と生計を共に致します以上、私にはもう従兄弟の遺族年金の受給資格はございませぬ。資格の返還が筋かと存じます。」

「そう。では、こつしましゅう。ルツン元帥の場合同様、何らかの形で社会に役立つ事業を運営する為の基金として、遺族年金と同額を毎年あてまじゅう。何か希望はあつて？」

「ではお言葉に甘えさせて頂いて、障害者、特に視覚障害者の救済及び教育にお役立て頂きますなら幸いに存じます。」

「ゴールデンバウム王朝成立と同時に、障害者を持つ者は社会から切り捨てられて参りました。補助機器があれば、十分に健康者と同じ生活が送れる方も大勢いらしやいます。残念ながら、補助機器があつても障害の克服の叶わぬ方もいらしやいます。そのような方達にもそれぞれの状態に合わせて、適切な教育・訓練が成されれば大分助かりまじゅう。もしお聞き届け頂けまじゅうならば、惑星オーディンにおける基金活動の拠点として、オーベルシュタイン家の住居を提供させて頂きます。」

「こつしてパウエル・フォン・オーベルシュタイン視覚障害者支援基金は設立されたのであつた。運営にエリザベートが加わつたのは言つまでもない。」

新帝國曆 五年（宇宙曆八 三年）四月一〇日、ビッテンフェルトとエリザベートは結婚した。

新婚の夫婦の住まいには、そのまま旧オーベルシュタイン邸が官舎としてあてられることになり、これまで独身でホテルの一室を宿舎としていたビッテンフェルトは、僅かばかりの身の回りの物をトランクに詰め込んで、新しくビッテンフェルト邸となる我が家へ転がり込むことになった。住人も調度品も同じであつたので、ビッテンフェルトにしてみれば「花嫁を迎えた」と言つより「婿養子に入った」気分であつたかも知れない。結婚式もその後の祝宴も、官舎の庭を使って行われ簡素なものであつたが、出席者の顔ぶれは豪華そのものであつた。

國務尚書ミッターマイヤー元帥一家、宇宙艦隊総司令官ミューラー元帥、軍務尚書メックリンガー元帥、憲兵總監兼帝都防衛司令官ケスラー元帥、幕僚總監アイゼナツ八元帥、軍務官官房長フェルナー中將も故

オーベルシュタイン元帥の直屬の部下として招待されていた。

「黒色槍騎兵艦隊、シュワルツ・ランツェン・イター、からは、副司令官ハルパーシュタット大将、参謀長グレーブナー大将、副参謀長オイゲン中將が出席していた。もっとも、黒色槍騎兵艦隊、シュワルツ・ランツェン・レイター、の兵士達は式場には登壇しなかつたものの、我が司令官閣下の結婚を喜び、フェザン市内の酒場で祝杯を挙げており、あまり祝い方が激しくて憲兵隊の世話になつた者も多数出た。」

獅子の泉、ルヴェンブルンの七元帥の中で、イゼルローン要塞総司令官ワレン元帥は、結婚式には出席出来なかつたが、祝辞を立体映像で送つて来ていた。

「ビッテンフェルト、結婚、誠にめでたい。心よりお祝い申し上げ、それにしても、卿がオーベルシュタイン元帥の従姉妹を奥方に迎えるとは正直言つて驚いている。帝國と共和主義者が共存する時代だ。ビッテンフェルト家とオーベルシュタイン家の共存も可能だろ。平和な世の中になつたものだ。奥方を大事にし。奥方、猪を頼みます。」

かつてビッテンフェルトがハイネセンでオーベルシュタインと対立し、ワレンとミューラーの尽力で事無きを得た事を知る出席者達に、この祝辞は共感を持つて受け取られた。そして彼らは、ワレンが、奥方を大事にし、と言つたのも彼の心からの助言だと知つていた。ワレンは結婚後一年あまりで夫人を亡くしていた。そして短い結婚生活の殆どを星路で過し、夫人の傍らに居てやれなかつた。その事は軍人である以上任方の無いことと思ひ決して悔いてはいなかつたが、どんなに愛していても、死んでしまつてからは何もしてやれないのだと言ふ事実を、ワレンは夫人のことを思い出す度に突きつけられていたのである。祝宴の片隅で、ミッターマイヤー元帥は

ケスラー元帥と並んで立つていた。少し離れた所では、もつとく三歳になるフェリックスがエヴァンゼリンの手を引つ張つて花壇の方に歩いていく。母親に花の名前を教え、貰ふつてもいづつのである。エヴァンゼリンの腹部は僅かに丸みを帯びて膨らんでいた。夏には家族が一人増える予定であつた。

「ミッターマイヤー、首席元帥、どちらが御希望ですか？」  
「何がだ？」  
「お子さんですよ。男の子ですか？女の子ですか？」  
「息子はもついるのでね。次はエヴァによく似た女の子がいいな。」  
「でも、男同士兄弟といつても悪くありませんよ。」

「ああ、そつたな。それにしてもケスラー元帥、無事にこゝまで来る事が出来たのは卿の御陰だな。礼を言つ。」  
「いや、私はなにもしてはおりませぬ。ビッテンフェルトに、卿は恋をしていてと教えただけです。」

「自分の気持ちに気が付いたビッテンフェルトが、フロインラインに突進して押し倒してもしたらどうしたものかと心配したが、そんな事になつたら関係修復不可能だからな。」

「いや、ビッテンフェルト元帥はそんな事をする男ではありませんよ。」  
「どうして判る？」  
「判ります。あいつの矜持が許しません。あいつには、あいつに相応しい堂々とした恋しか出来ませぬ。」

「ふむ。ところでケスラー元帥、次は卿の番だな。」  
「えっ、…御存知でしたか？」  
「ミッターマイヤーは微笑してうなずいた。『マリイカが、二〇歳になつたら結婚しようと思つています。』」

「何故二〇歳なんだ？」

「憲兵總監が未成年者と結婚といつのはまずいでしよう。」  
「俺と結婚したとき、エウアは一九歳だった。」

「花婿の年齢をお考え下さい。首席元帥は二四歳でしたが、小官は四一歳です。この間もマリーカと食事に出かけたら、店の者にお嬢様ですかと聞かれました。結婚して子供を持ったら、おじいちゃんご孫とでも思われるかも知れません。」

祝宴の中心では、新郎新婦が列席者に囲まれて祝福を受けていた。オレンジ色の髪をした猛将は大声で礼を言い、冷やかされても大声で笑い飛ばした。純白の髪の花嫁は、少し恥ずかしそつに目を伏せ、夫となつた男性の腕に手を置き、時折夫の顔を見上げる瞳には、信頼と愛情が溢れていた。どちらも幸せそつであつた。

ラーベナルトは祝宴の進行を任されており、ジュースだのワインだのチーズだのが十分に足りているが、各テーブルに目を走らせていた。  
彼はヒッテンフェルトとエリザベートの婚約を二人から知らされた時、二人の結婚と同時にエリザベートの許を辞する旨を伝えた。然し、ヒッテンフェルトはそれを許さなかつた。

「ラーベナルト、お前には死ぬまでフロイヤインの近くに居て貰わんと困る。天上、ヴァルハラ、のオーベルシュタイン元帥にエリザベートがどんなふうに着らしているか、伝えに行つて呉れるような殊勝な奴はお前位しかおらんからな。精々長生きして、しつかり見てから逝つてくれ。」  
ヒッテンフェルト以外の人間が言つたら、何とも無礼千万な台詞であつたが、これが彼なりの優しさの表現とラーベナルトには判つており、一生を二人の近くで過ごす事を誓つたのであつた。

祝宴が終わり、出席者が最後の挨拶をして次々と引き揚げ始めた。一番最後に最も若いミュラー元帥がやつて来た。  
既に夜の帳が降り、星が輝き始めた空を見上げ、ヒッテンフェルトは若い僚友に話し掛けた。

「なあ、ミュラー元帥、俺はオーベルシュタインが生きていた頃、奴のことが大嫌いで、早く死ねばいいときを思つてた。どうしてあんな奴が生きているんだって、天を恨んだ事もあつた。今でも奴のことは好きになれんが、最近思つたのだ、人間って奴は、どんな奴でも生まれて来た理由、生きてる訳つていうものがあつて、居なくなつて良い人間なんていないのではないかと。みんな、何処かに必要だから生まれてくるのさ。オーベルシュタインの奴がいなくなつたら、エリザベートは今頃生きていなくなつたらどうし、俺もエリザベートに会えなかつたらどうし、エリザベートを助けて育ててくれたといつただけで、俺はあいつに感謝せねばならんのかも知れん。」  
随分自分本位な言い方によつてあつたが、何となくヒッテンフェルトの言いたい事が判るような気がして、ミュラーは「そつですね。」と頷いた。

最後に少しだけ、この夫妻のその後について記しておこう。

ヒッテンフェルト元帥は後に王党派の指導者として活躍した。共和主義者のリーダー、ダスティ・アッテンボロとの度重なる舌戦と何回かの乱闘は、長く人々に語られる事となつた。

エリザベート夫人は、夫の良き助言者として常にその傍らにあつた。確かな識見と冷静な判断力、そして穏やかで、居るだけでその場の空気を和らげる人柄は、誰からも愛された。  
夫妻は男子二人、女子二人、計四人の子

供に恵まれた。

長男ハル・フリッツ・ヒッテンフェルトは父と同じオレンジ色の髪をしていた。姿は父そつくりであつたが、性格は正反対と言つて良く、長じて官僚となつた。「オレンジ色のオーベルシュタイン」と呼ばれている。  
次男イダルベルト・ヨゼフ・ヒッテンフェルトは黒つぽい髪と薄茶色の瞳をしており、兄とは逆に、外見はオーベルシュタインに似ていたが、性格はヒッテンフェルトそのもので、軍人への道を進んだ。

長女アナスタシア・ヒッテンフェルトは、最も母親似で、当然の事ながら、父親の掌中の珠であつた。

そして、次女ワイオレッタ・ヒッテンフェルトは、黒髪とすみれ色の瞳、そして「エリザベート夫人の声帯とヒッテンフェルトの肺活量の賜物」とメックリンガーが評した素晴らしい歌声の持ち主で、不世出の歌姫として銀河を席巻した。彼女の銅像は今も帝国オペラ劇場の前に立っている。

(完)

### 【作者あとがき】

こんにちは、イヌラー舎のフミヲです。  
この度は、小官の作品をお読みいただきありがとうございます。『パウル』は小官の初めて書いた作品です。構想二日、執筆五日、パソコン入力日という筆の勢いに任せて書いた作品ですので、読んで下さる方に果たして満足して頂けるかと不安です。筆の勢いに任せて書いた作品と言つても、決していい加減な気持ちで書いた訳ではありません。銀英伝を知ったときから、興味

ある人物が如何なる生い立ちでその人格を形成するに至つたのか、また新帝国暦三年七月二十七日以降どうつたかを想像して読んでおりましたので、我が飼い主が、銀英屋台なるホームページを発見し、そこに載せられた作品を見て、自分も書いてみようかな、と思つたときには、既に私のオーベルシュタイン元帥に対するイメージはほぼ出来上がつておりました。構想に要した二日というのはストーリー展開のための時間です。

我が飼い主は、『パウル』をヒッテンフェルトの話として読んでくれました。それもまた事実です。しかし、この作品の出発点はオーベルシュタイン元帥でした。オーベルシュタイン元帥の生い立ち、それに絡む少女の存在、オーベルシュタイン元帥の死後、彼の想いを受け継ぐ人物、その順番でストーリーは決まっていきました。その事を言いましたら我が飼い主は「そつだつたの?」と少し驚いておりました。小官がヒッテンフェルトのことも気に入っていると知つていたからでしょう。

当初、エリザベートに心を寄せる人物として小官の頭に浮かんだのは、温厚なミュラーでした。でも、殆どその場で却下されました。(ミュラーファンの人、ごめんなさい!)次に候補に挙がつたのがヒッテンフェルトでした。彼の強い個性ならオーベルシュタインにも負けないだろつと思つたのです。また彼も小官の生い立ち推察記の登場人物でしたし、心の何処かでヒッテンフェルトにもオーベルシュタインの有りようを認めて欲しかつたのかも知れませぬ。

尚、ホームページでこの小説を公開後、次のような質問を頂きました。  
「オーベルシュタイン以外には心を開かなかつたエリザベートが、どうして簡単にヒッテンフェルトには心を許したのでしょうか?」  
これは、私の中では次のような理由により

ます。：オーベルシュタインの訃報を持って訪れたヒッテンフェルトを、エリザベートは亡くなった従兄弟の最も親しかった人物と誤解したのです。オーベルシュタインはエリザベートに余計な不安を与えぬ為にも、僚友との関係や仕事の話題を彼女の前ではしませんでしたから、彼女はヒッテンフェルトの献身を、オーベルシュタインへの友誼故と信じておりました。そして、真実を知る頃には、ヒッテンフェルトはエリザベートにとって、「パウエル様の大切な友人」としてではなく、「ヒッテンフェルト」として、心の中に住みつけていたのです。私の筆が足りず、十分にそのことが作品中に表現できませんでした。ここで邪道ですが、補足させて頂きま

す。  
我が飼い主は、小官の描くところのオーベルシュタイン元帥は、少々ロマンチストに過ぎるのではないかと感じていたよつです。まあ、百人の人が本を読めば、百通りの感想が生まれるわけですから、小官のイメージに不満な方が居るのは当然と言えましよう。

小官としては、心の底まで無機的なまでに冷え切った人物に偉業は成し得ないと考えております。表面はどつ見えようといには熱い心を秘めていてこそ難題にも立ち向かえるのではないかと。そして人の上に立つのに最も適しているのは熱い心を人一倍持ちながらも、決して感情に流されることなく冷静に大同を見つめて判断を下せる人物なのだと思います。オーベルシュタインがラインハルトに望んだのはそれではなかったかと思うのですがどう思われますか？ 勿論両者を両立させるのは難しいことで、ヒルダが危惧したようにラインハルトの感性を干上からせ虚無に陥らせるかも知れません。名君が名君で有り続けるのが難しいのでしよう。しかし、オーベルシュタインは自分の若い主君に血の通わぬ機械人形や権力の亡者になることを望んではいなかった

た筈です。

皆様の御感想をお待ちしています。御批判でも構いません。小官以外の方々が銀英伝をどの様にとらえ、登場人物にどの様なイメージを抱いておられるのかを知ることが出来ましたら、小官も銀英伝をもっと色々な角度からとらえられるようになると思います。

フミラ

【お断り】

本作品は『銀河英雄伝説』のファンとしての強い思い入れから生まれたものであり、決して原作者（田中芳樹氏）の利益を妨害する目的で書かれたものではありません。

この作品の著作権は、作者フミラ及び発行元イヌラー舎にあります。無断で内容を変更したり、販売したりしないでください。